

令和元年度 設楽ダム関連発掘調査成果報告会

新設楽発見伝 6

配付資料

日時：令和2年3月7日（土）

会場：設楽町役場議場

報告会次第・目次

設楽ダム関連埋蔵文化財包蔵地（遺跡）と周辺遺跡 2

13時30分～13時40分

令和元年度の設楽ダム関連の発掘調査について

伊藤真央 4

(愛知県教育委員会)

13時40分～14時00分

報告1 上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の発掘調査

永井宏幸 6

(愛知県埋蔵文化財センター)

14時00分～14時20分

報告2 石原遺跡の発掘調査

田中 良 10

(愛知県埋蔵文化財センター)

14時20分～14時40分

報告3 万瀬遺跡の発掘調査

河嶋優輝 14

(愛知県埋蔵文化財センター)

===== 休 憩 =====

14時50分～15時50分

講演 信州の遺跡・遺物からみた設楽地域

綿田弘実 26

(長野県埋蔵文化財センター)

15時50分～16時30分

座談会 縄文時代の設楽—ヒト・モノ・コトの動き—

聞き手 川添和暁

(愛知県埋蔵文化財センター)

進行・司会 尾崎綾亮

(愛知県埋蔵文化財調査センター)

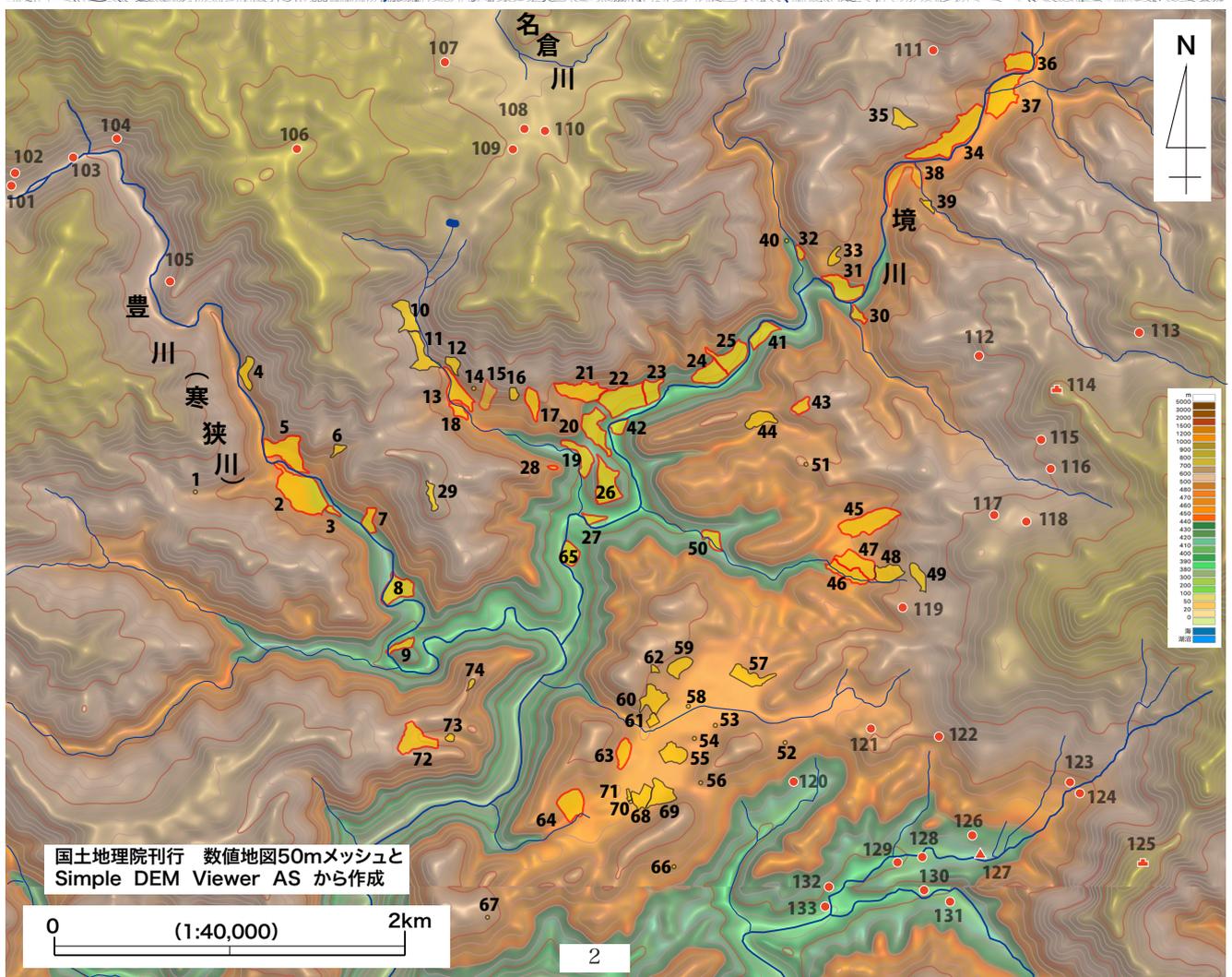
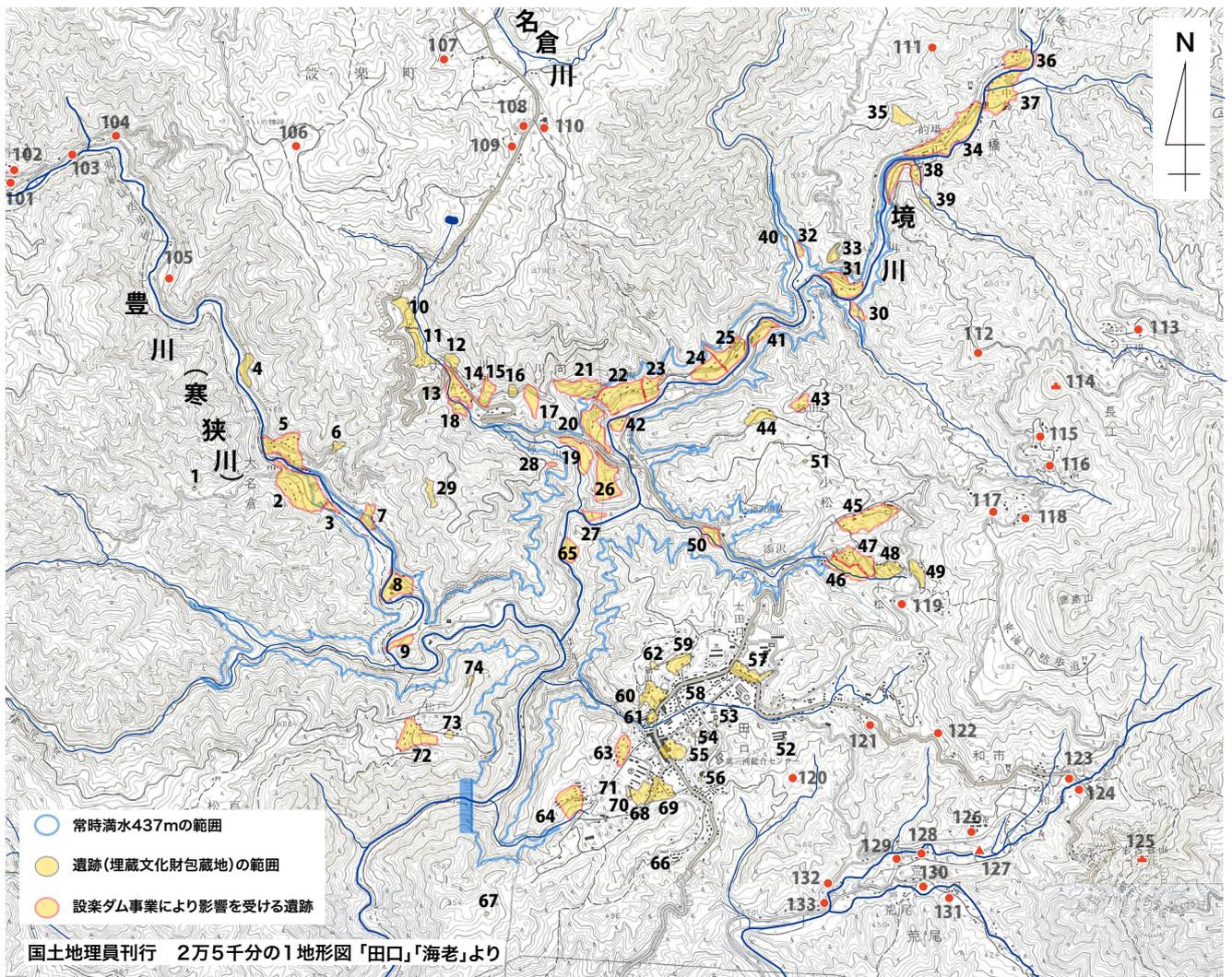
主催  設楽町教育委員会

 国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所

 (公財)愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター

 愛知県教育委員会

設楽ダム関連埋蔵文化財包蔵地(遺跡)と周辺遺跡の位置図(遺跡の番号は左表と一致)



本発掘調査A（事前調査）実施遺跡

本発掘調査B（全面調査）実施遺跡

発掘調査報告書刊行遺跡

設楽ダム関連埋蔵文化財包蔵地（遺跡）と周辺遺跡の一覧

地区 (旧大字)	番号	遺跡名	読み	県遺跡 番号	所在地	後 期 旧 石 器	縄 文 期	弥 生 期	古 墳 期	飛 鳥 ・ 奈 良	平 安 期	鎌 倉 期	室 町 期	戦 国 期 — 近 世 初 頭	備考
大名倉	1	沢入り遺跡	さわいり	700155	大名倉字沢入り	○	?								
大名倉	2	大名倉遺跡	おおなぐら	700297	大名倉字滝ノ上・滝ノ下・下谷・南貝津	○	○								下谷遺跡
大名倉	3	日掛遺跡	ひかげ	700328	大名倉字日掛										
大名倉	4	栢ノ久保遺跡	かやのくぼ	700151	大名倉字新蔵	○									
大名倉	5	西地・東地遺跡	にしじ・ひがしじ	700152	大名倉字西地・東地	○									
大名倉	6	後沢遺跡	うしろざわ	700154	大名倉字後沢	○									
大名倉	7	ハラビ平遺跡	はらびだいら	700157	大名倉字ハラビ平	○									
大名倉	8	胡桃窪遺跡	くるみくぼ	700158	大名倉字胡桃窪・丸山										
大名倉	9	大名倉丸山遺跡	おおなぐらまるやま	700347	大名倉字丸山										?
川向	10	川向田ノ入遺跡	かわむきたのいり	700351	川向字田ノ入										
川向	11	三軒屋遺跡	さんげんや	700159	川向字三ゲンヤ	○									
川向	12	梨子谷下遺跡	なしやげ	700329	川向字梨子谷下										
川向	13	上戸神遺跡	かみとがみ	700160	川向字上戸神・下戸神	○									
川向	14	道合遺跡	みちあひ	700161	川向字道合	○									
川向	15	川向萩ノ平沢遺跡	かわむきはぎのひらさわ	700352	川向字萩ノ平沢・小万	○									
川向	16	道上遺跡	みちあげ	700345	川向字萩ノ平沢・小万	○									
川向	17	川向力石遺跡	かわむきちからいし	700353	川向字萩ノ平沢・小万										
川向	18	川向山遺跡	かわむきむかいやま	700354	川向字向山										
川向	19	大栗遺跡	おおぐり	700163	川向字大栗	○	◇								
川向	20	万瀬遺跡	まんぜ	700165	川向字マンゼ	○	◇	◇							
川向	21	大空前遺跡	おおぞらまえ	700166	川向字大空前・新直	○									
川向	22	上ヲロウ・下ヲロウ遺跡	かみおろう・しもおろう	700167	川向字上ヲロウ・下ヲロウ・中空	○									
川向	23	川向近沢遺跡	かわむきちかざわ	700355	川向字近沢・馬道	○									
川向	24	石原遺跡	いしはら	700170	川向字石原・ヒチコ	○									
川向	25	下延坂遺跡	しもべさか	700171	川向字下延坂・上延坂	○	○								
川向	26	大畑遺跡	おおはた	700164	川向字大畑・東貝津	○									
川向	27	川向東貝津遺跡	かわむきひがしがいづ	700348	川向字東貝津	◇	○								
川向	28	南ヶ岳遺跡	みなみがたけ	700162	川向字南ヶ岳	?									
川向	29	光石山候補地	みつ(ひかり)いしやま	700162	川向字向山										?
八橋	30	八橋大平遺跡	やつはしおおびら	700349	八橋字大平	○									
八橋	31	滝瀬遺跡	たきせ	700174	八橋字タキセ	○	◇								
八橋	32	根道外遺跡	ねみちそと	700173	八橋字根道外	○									
八橋	33	長久保遺跡	ながくぼ	700331	八橋字長久保	○									
八橋	34	中村遺跡	なかむら	700176	八橋字道上・下下・西路	○									
八橋	35	八橋アテ遺跡	やつはしあて	700356	八橋字アテ	○									
八橋	36	八橋谷合遺跡	やつはしやわせ	700350	八橋字谷合										
八橋	37	向橋遺跡	むこうばし	700178	八橋字向橋										向林遺跡
八橋	38	永江沢遺跡	ながえさわ	700175	八橋字崩沢	○									
八橋	39	八橋崩沢遺跡	やつはしなぎさわ	700357	八橋字崩沢	○									
八橋	40	境川林道遺跡	さかいがわりんどう	700330	八橋字コハツカ	○									黒曜石の原石のみ採取
小松	41	マサノ沢遺跡	まさのさわ	700172	小松字マサノサワ	○	○								
小松	42	笹平遺跡	ささだいら	700169	小松字笹平	○	○								
小松	43	丸瀬遺跡	まるせ	700184	小松字丸瀬										
小松	44	小松沢上ゲ遺跡	こまつさやげ	700358	小松字沢上ゲ										
小松	45	柿平遺跡	かきだいら	700189	小松字波根・栗沢										
小松	46	中屋地遺跡	なかやじ	700190	小松字中屋地										
小松	47	下り道遺跡	くだりみち	700191	小松字下り道・中貝津・下中熊										
小松	48	下中熊遺跡	しもなかくま	700192	小松字下中熊・中貝津										

地区 (旧大字)	番号	遺跡名	読み	県遺跡 番号	所在地	後 期 旧 石 器	縄 文 期	弥 生 期	古 墳 期	飛 鳥 ・ 奈 良	平 安 期	鎌 倉 期	室 町 期	戦 国 期 — 近 世 初 頭	備考
小松	49	上中熊遺跡	かみなかくま	700193	小松字上中熊										
田口	50	添沢遺跡	そえざわ	700188	田口字添沢	○									
田口	51	添津遺跡	そえづ	700187	田口字添津	○	?								
田口	52	一ノ橋遺跡	いちのはし	700197	田口字杉平向	○									
田口	53	向木屋遺跡	むかいぎや	700201	田口字向木屋	○									
田口	54	城下遺跡	しろした	700202	田口字小木山										
田口	55	天白遺跡	てんぱく	700203	田口字広貝津	○	○								
田口	56	向木屋城跡	むかいぎやじょうあと	700206	田口字向木屋										?
田口	57	東遺跡	ひがし	700198	田口字谷下・白根土										
田口	58	稲場遺跡	いなば	700333	田口字辻前	○									
田口	59	中島遺跡	なかじま	700199	田口字中島	○									
田口	60	居立遺跡	いでて	700200	田口字居立		○	○							
田口	61	半兵衛屋敷(田口村古屋敷)	はんべえやしき(たぐちむらふるやしき)	703001	田口字小貝津										
田口	62	田口大久保遺跡	たぐちおおくぼ	700359	田口字大久保	○									
田口	63	田口西貝津遺跡	たぐちにしがいづ	700360	田口字西貝津										
田口	64	田口シウキ遺跡	たぐちしうき	700361	田口字シウキ										
田口	65	大崎遺跡	おおさき	700195	田口字大崎	○									?
清崎	66	根ノ後遺跡	ねのこ	700344	清崎字根ノ後	○									
清崎	67	大塚遺跡	おおみね	700226	清崎字大塚	○	?								
清崎	68	広畑遺跡	ひろはた	700204	清崎字広畑・狐洞										
清崎	69	萩平遺跡	はぎだいら	700205	清崎字山本・水口										
清崎	70	萩平村古屋敷	はぎだいらふるやしき	703005	清崎字狐洞										?
清崎	71	垂原藩田口代官所	しげはらはんたぐちだいかんしよ	703002	清崎字狐洞										近代
清崎	72	松戸遺跡	まつど	700334	松戸字家廻・向畑										
清崎	73	松戸下畑遺跡	まつどしたばた	700362	松戸字下畑										
清崎	74	松戸城跡	まつどじょうあと	703004	松戸字イサケトチ										?
東納庫	101	大家下遺跡	おおやした	700147	東納庫字若クラ										
東納庫	102	澄川口遺跡	すみかわくち	700146	東納庫字澄川口										
東納庫	103	岩クラ遺跡	いわくら	700148	東納庫字若クラ	○									
東納庫	104	長根遺跡	ながね	700149	東納庫字長根	○									
東納庫	105	長尾遺跡	ながお	700150	東納庫字長尾	○									
東納庫	106	普沢山遺跡	すげさわやま	700143	東納庫字普沢山		○								弥生は水神平式
川向	107	モロ田遺跡	もろだ	700137	川向字モロ田										
川向	108	市場口遺跡	いちばぐち	700138	川向字市場口	○									
川向	109	西長沢遺跡	にしながさわ	700139	川向字市場口	○									
川向	110	庄之子呂遺跡	しょうのこ	700140	川向字庄之子呂	○									
八橋	111	八橋杉平遺跡	やつはしすぎたいら	700177	八橋字杉平	○									
長江	112	御堂山遺跡	みどうやま	700181	長江字御堂山										
長江	113	天堤遺跡	あまつつみ	700180	長江字天堤		○								弥生は水神平式
長江	114	長江城跡	ながえじょう	700296	長江字松ヶ根										
長江	115	尊手平遺跡	そんでびら	700182	長江字尊手平	○									御物石器?
長江	116	本江遺跡	ほんえ	700183	長江字本江										
長江	117	寺トコ遺跡	てらとこ	700185	長江字田平										
長江	118	田平遺跡	ただいら	700184	長江字田平										
小松	119	下湯分沢遺跡	しもゆぶんざわ	700194	小松字下湯分沢										
田口	120	オリシ遺跡	おりし	700207	田口字オリシ										
小松	121	小松杉平遺跡	こまつすぎたいら	700196	小松字杉平	○									
荒尾	122	寒相遺跡	かんぞう	700208	荒尾字寒相		○								弥生は水神平式含む
和市	123	清水遺跡													

令和元年度 設楽ダム関連発掘調査について

愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室 伊藤真央

1. はじめに

2. 令和元年度設楽ダム関連の発掘調査について

○令和元年度発掘調査遺跡一覧

2・3頁遺跡番号	遺 跡 名	発掘調査の種別	令和元年度調査面積 (㎡)
22	上ヲロウ遺跡・下ヲロウ遺跡	本発掘調査B	3,600
24	石原遺跡	本発掘調査B	6,800
20	万瀬遺跡	本発掘調査B	8,200
21	大空前遺跡	本発掘調査A	80
合 計			18,680

3. 開発事業と埋蔵文化財に関する諸手続きについて

(1) 有無確認・現地踏査

○遺跡地図、資料・文献等で確認した上で現地踏査を行い、地表面を観察することで遺物の散布状況を確認し、遺跡の有無及び現状を把握するための調査をします。

(2) 試掘・確認調査

○有無確認等で得た情報をもとに、地下の埋蔵文化財の状況を確認するため、必要な箇所を部分的に掘削する小規模な調査です。調査する場所が遺跡として周知されているか否かで、「試掘調査」と「確認調査」に区分されます。重機あるいは人力で掘削作業を行います。

【試掘調査】 遺跡として台帳・地図に未記載で、周知もされていない場所について、「遺跡の有無」や「範囲・種類・残り具合」等を確認する調査です。

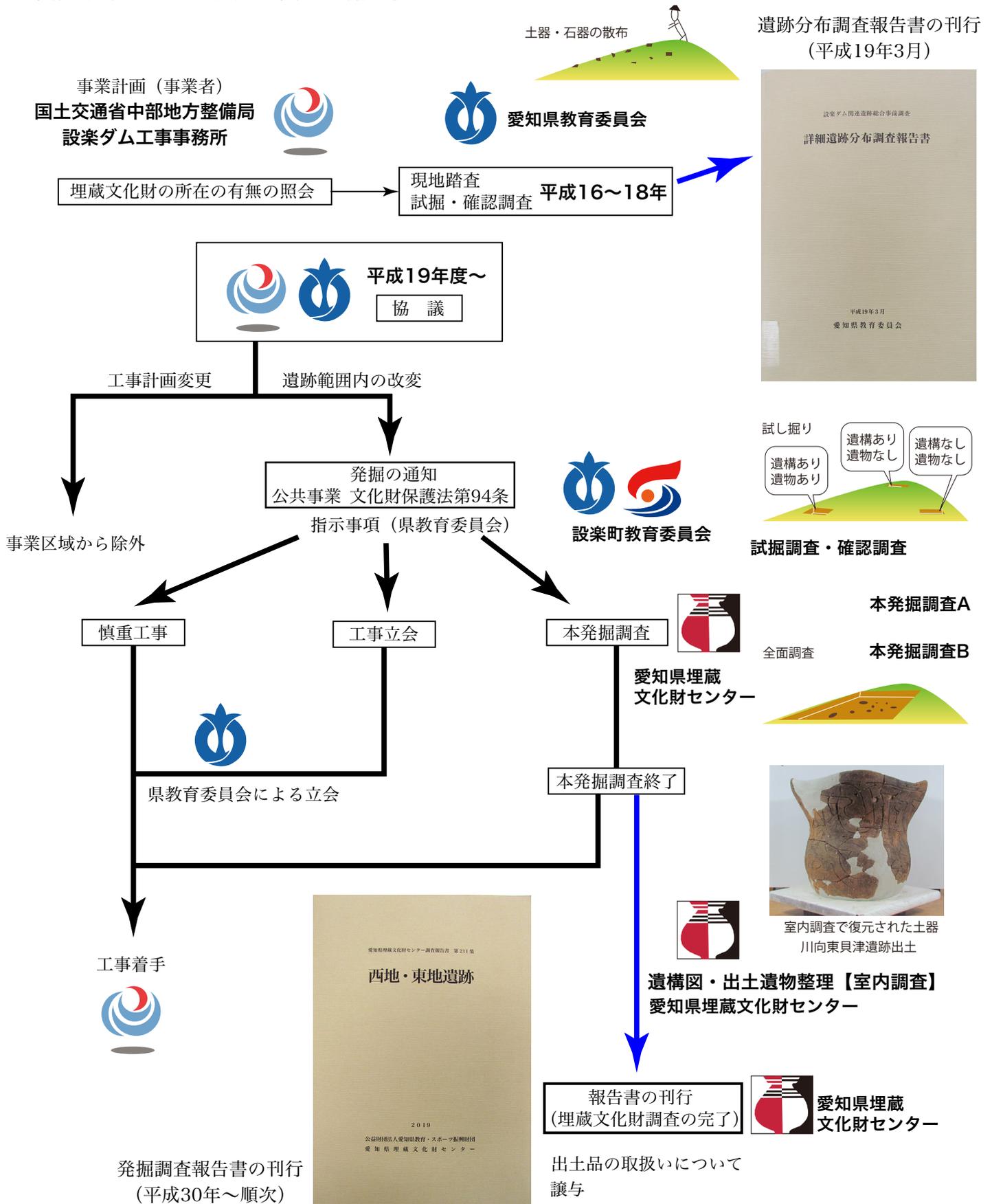
※遺跡がある場合、調査結果から、遺跡の取扱い(本発掘調査・工事立会・慎重工事)を決定します。

【確認調査】 遺跡として既に記載され、周知されている場所について、「遺跡の範囲・種類・残り具合」等を確認する調査です。遺跡の取扱い(本発掘調査・工事立会・慎重工事)を決定します。

(3) 本発掘調査

○公共事業によって滅失する遺跡の記録保存のために行う発掘調査です。調査対象地全面を発掘調査する「本発掘調査B」を基本とし、Bの実施前には、遺跡範囲・規模をさらに詳細に確認するために、事前調査「本発掘調査A」を行います。

開発事業と埋蔵文化財に関する諸手続について



開発事業と埋蔵文化財調査の流れ

報告1. 上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の発掘調査

愛知県埋蔵文化財センター 永井宏幸

所在地：北設楽郡設楽町川向地内（北緯35度6分50秒 東経137度34分1秒）

調査期間：令和元年5月～令和元年9月

調査面積：3,600㎡

調査担当者：酒井俊彦・永井宏幸・宮腰健司

立地と環境

遺跡は、豊川水系境川右岸の河岸段丘から山地へ上がる緩やかな斜面地に立地します。今回の調査区での比高差は8.5mあります。隣接する周辺の遺跡としては、遺跡の上流に石原遺跡、下流に万瀬遺跡、境川を挟んで対岸に笹平遺跡があります。今年度の発掘調査は、遺跡の中央を横断する県道432号小松田口線の南側境川寄りを行いました。

調査の成果

遺跡の現況は、農地として利用されていました。片麻岩を利用して、高いところでは2m以上積み、緩斜面に数段の平坦面が造成されていました。この造成に関わる表土を除去すると調査区中央に土石流によるおびただしい砂礫の堆積が広がっています。いつ起きた土石流かわかりませんが、土石流の影響がないところに縄文時代晩期を中心とする遺構群、江戸時代後半の遺構群が確認されました。

江戸時代後半の屋敷地と考えられる遺構は、調査区北西寄りに展開し、県道に隣接して建物跡と思われる柱穴を5基以上確認しました。柱間を推定できるような配置は確認できなかったものの、建物跡を構成する柱穴に、柱痕跡を断面確認した遺構が5基程度ありました。柱穴の南側では、東西方向に並んで、1m四方、深さ0.5m前後の不定形な土坑を5基確認しました。これらのうち、東端の土坑085SKから広東碗と煙管、中央の土坑083SKから皮革で包んだ煙管が出土しました。煙管はお墓の副葬品としてよく用いられる遺物であることと、土坑の形や大きさから座葬を想定できることから、人骨などは残っていませんでしたが墓塚と考えられます。また、これら江戸時代の遺構群の南東隅に逆L字状の溝を確認しました。おそらく屋敷地を囲む溝として配置されていたと思われます。なお、この溝の上位には拳大前後の礫が埋設されていました。県道を挟んで遺跡の南西から北西に向かって延びる道が元文元（1736）年川向村絵図に記載され、江戸時代の遺構群は、この道沿いの屋敷地と考えられます。

江戸時代の遺構群に南接して2m四方前後の方形遺構^{ほうけいごう}を5基程度確認しました。出土遺物は縄文時代中期^{ちゅうぎ}から晩期^{やよいじだいせんき}、弥生時代前期^{どき}におよぶ土器^{せつき}、石器があります。遺構は明確に輪郭が確認できたものの、掘りかたは不明瞭でした。その理由としては、遺構埋土の土質が基盤層^{まいど}と明瞭に分層できなかつたからです。

一方、これとは別に、調査区南東寄りに縄文時代晩期を中心とする2～3m前後の方形遺構を5基前後確認しました。全てが竪穴建物かは確定できませんでしたが、プランのほぼ中央に焼土と炭化物を伴う石囲炉^{しょうど たんかぶつ いしがこいろ}247SLを付設する206SKは、長軸2.9m、短軸1.8mを測る方形の竪穴建物^{たてあなたもの}です。



遺跡の全景（東より）



縄文時代の竪穴遺構 113SK



江戸時代の墓壇群



煙管出土状態江戸時代の墓 083SK



縄文時代の竪穴建物 206SK



縄文土器出土状態 044SK





上ヲロウ遺跡・下ヲロウ遺跡 調査区全体図

報告 2. 石原遺跡の発掘調査

愛知県埋蔵文化財センター 田中 良

所在地：北設楽郡設楽町川向地内（北緯35度6分55秒 東経137度34分22秒）

調査期間：令和元年5月～令和元年11月

調査面積：6,8000㎡（調査の都合上、19A区・19B区・19C区の3調査区に分ける）

調査担当者：酒井俊彦・武部真木・田中 良

立地と環境

石原遺跡は、豊川上流の境川右岸の河岸段丘および沖積地に位置しています。平成30年度の発掘調査では、縄文時代中期～晩期（約5500年～3000年前）の遺構や遺物が出土しています。また、ここより上流の左岸に所在するマサノ沢遺跡では、平成29年度の発掘調査でハート形土偶が出土しています。

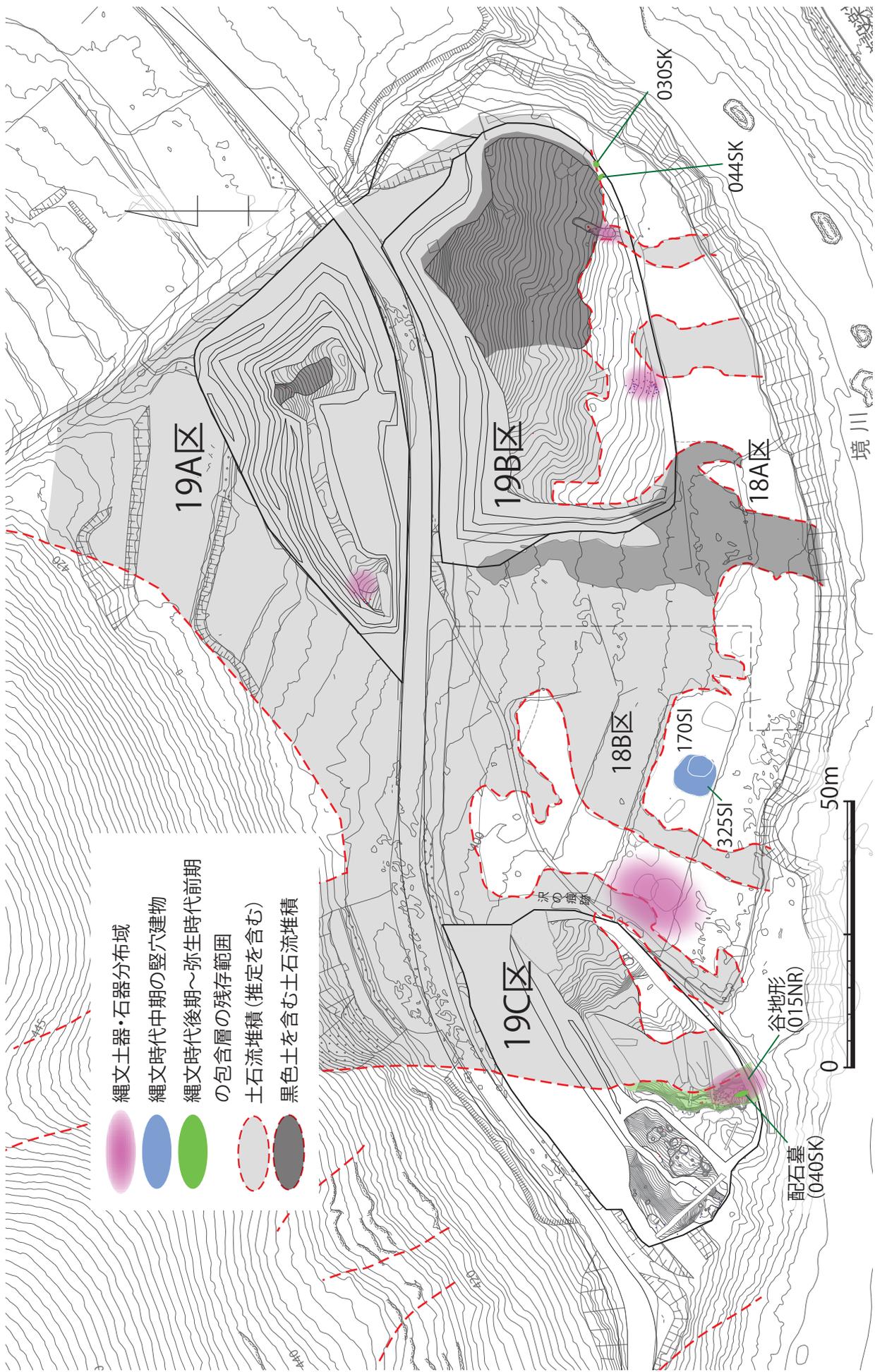
調査の成果

今年度の石原遺跡の調査では、19A区と19B区からは縄文時代の遺物が、19C区は縄文時代後期末～弥生時代前期（約3,500年～2,500年前）までの谷地形（遺物包含層）と配石墓などが検出されました。

19C区は、上・中段が近代以降の土地改変により、地形が大きく変わっていましたが、川よりの下段では縄文時代後期末から弥生時代前期にかけての谷地形（015NR）と配石墓（040SK）などの遺構が検出されました。谷地形（015NR）からは、2層（黒色土と暗褐色土）の遺物包含層が良好な状態で検出され、黒色土からは縄文時代後期末から縄文時代晩期、暗褐色土は縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての土器や石器が大量に出土しました。また、黒色土中から、配石墓（040SK）や集石遺構（042・043・044SK、045SU）などが検出されたことは、一時的に廃棄を止め、生活の場として利用していた期間があったことがうかがえます。

出土遺物は、縄文時代後期末から弥生時代前期までの土器が大量に出土しており、縄文時代晩期後葉の土器が最も多く出土しています。また、土器の表面や裏面に煤が付着していることから、煮炊きなどに使用したものと考えられます。石器は、石鏃・削器・打製石斧・磨製石斧・礫器・磨石・敲石・台石などが出土しています。また、石鏃が少なく、打製石斧や磨製石斧、磨石などの加工具が多く出土しており、土器と合わせて、ドングリなどの堅果類の加工を積極的に行っていたことがうかがえます。

今回の調査では、谷地形とそれに伴う包含層、配石墓などの遺構が検出されましたが、それらを作った集落や居住地を発見出来ませんでした。しかし、周辺に集落が展開していた可能性が高いことから、今後の調査が期待されます。



石原遺跡全体図



石原遺跡全景



19A区全景(東から)



19B区全景(南から)



19B区遺物出土状況(南から)



19C区全景(東から)



谷地形015NR 遺物包含層(南から)



谷地形015NR 土層断面TT03(南西から)



谷地形015NR 遺物出土状況(東から)



谷地形015NR 遺物出土状況(北西から)



配石墓040SK(東から)



集石遺構042・043SK(東から)



集石遺構045SU(西から)



谷地形015NR(南から)

3. 万瀬遺跡の発掘調査

愛知県埋蔵文化財センター 河嶋優輝・川添和暁

北設楽郡設楽町川向字マンゼ (北緯35度06分46秒 東経137度33分54秒)

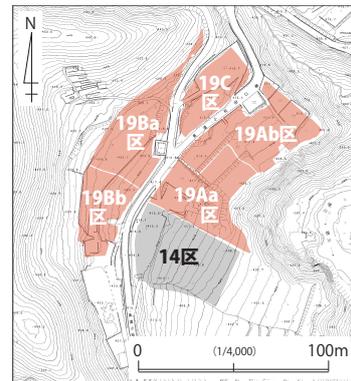
調査期間：令和元年6月～令和2年1月

調査面積：8,200㎡ (調査の都合上、19Aa区・19Ab区・19Ba区・19Bb区・19C区の5調査区に分ける)

調査担当者：酒井俊彦・川添和暁・河嶋優輝

立地と環境

万瀬遺跡は、^{さかいがわ}境川の西側の^{きゅうりょうまつたん}丘陵末端の^{かんしゃめん}緩斜面上に立地します。この場所は^{おおはた}大畑遺跡が立地する岬状した丘陵付け根の北東側奥部にあたり、その反対側付け根となる南西側の奥部には^{おおぐり}大栗遺跡が位置します。標高は、愛知県道432号小松田口線を挟んで、410～425mです。この丘陵は^{へん}片麻岩由来の岩盤によるもので、地形の凹地には^{だいさんき}第三紀以前の^{ねんどそう}風化による均質な粘土層が所々で認められています。



調査区位置図

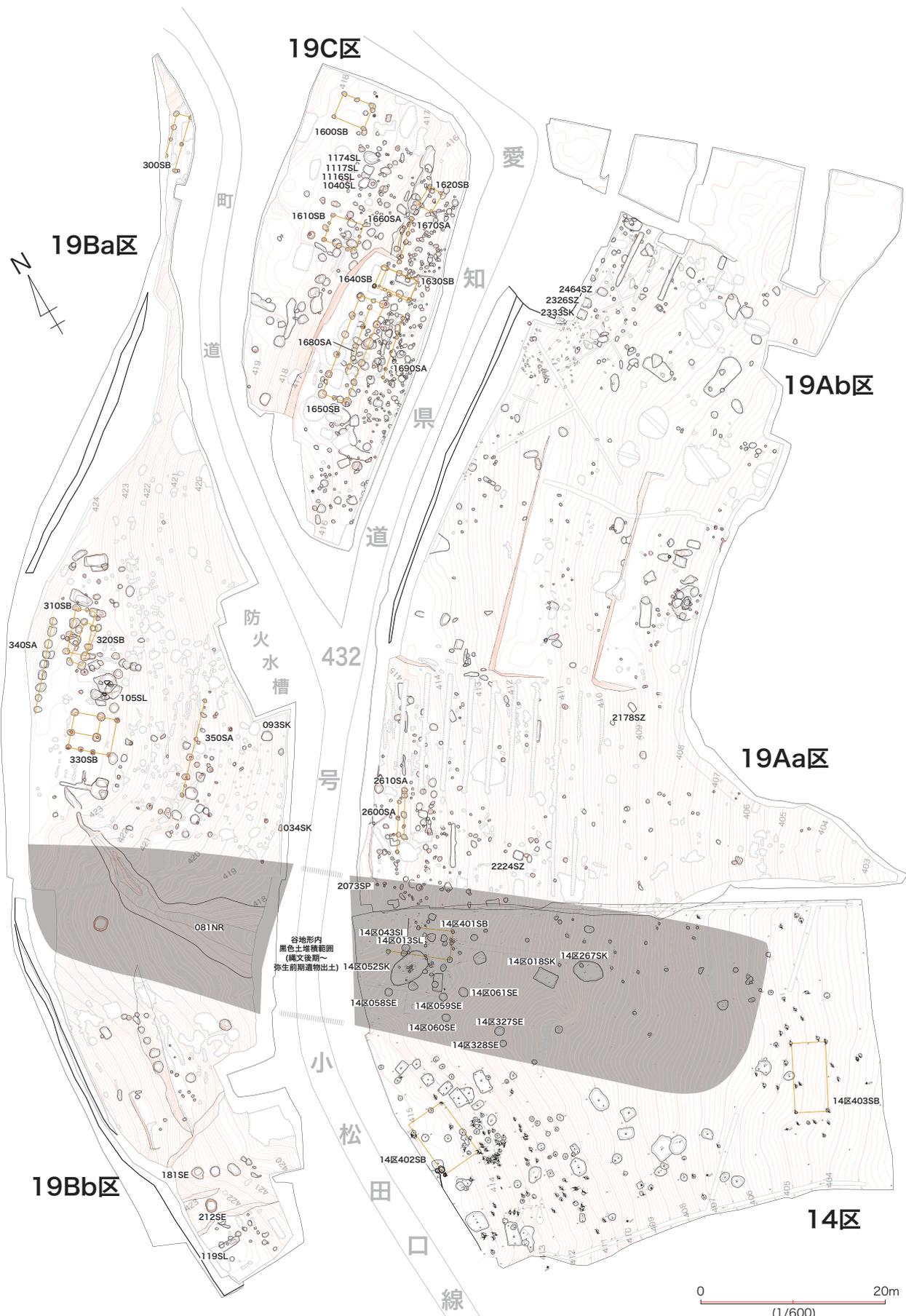
調査成果のあらまし

基本層序は、上から、第1層：表土および^{きんだい}近代以降の盛土・耕作土、第2層：^{ちゅうせい}中世から^{きんせい}近世の^{じょうもん}黒色土、第3層：^{そうきぜんほん}縄文時代早期前半以前の^{はいおうかつしよくねんど}にぶい灰黄褐色粘土を主体とする^{いぶつぼうがんそう}遺物包含層、第4層：^{おうかつしよく}黄褐色粘土および^{れき}礫層(地山)、です。

今年度は下表にある遺構・遺物が、調査で見つかりました。

時代・時期	確認調査区	検出遺構	出土遺物	備考
縄文時代草創期1	Ab区		有舌尖頭器・木葉形尖頭器	狩り場か。
縄文時代草創期2	Ab区	土器横位出土遺構1	表裏縄文土器	当地での活動形成の始まり。
縄文時代早期前半	Aa区・Ab区・C区	竪穴建物跡6、炉穴4、集石炉跡4、遺物包含層(捨て場)	押型文土器・撚糸文土器・石鏃・礫器・剥片石核類・磨石・砥石類・石皿・台石類	縄文時代集落形成の主体時期。地形と遺構群との関係が良好に分かる。
古墳時代前期	Ba区	土坑1	甕・高坏	
中世～近世	Aa区・Ab区・Ba区・Bb区・C区	掘立柱建物跡10程度、柵列、焼土遺構、井戸、土坑墓4、その他土坑・ピット多数	陶器(山茶碗・摺鉢・天目茶碗・水滴・その他近世陶器)、土師鍋(伊勢型・内耳)、砥石、銅銭(寛永通宝)・キセル・火打金・鉄滓	倉庫と考えられる大型の掘立柱建物跡の確認。『設楽町誌』記載の郷倉とお堂に対応する建物跡を確認。
近世以降	Ba区・Bb区	谷地形内遺物堆積	近世陶器、土器(深鉢・注口土器)、石鏃・打製石斧・礫器・剥片・磨製石斧	出土遺物は、縄文時代後期～弥生時代前期主体で、近世陶器が混じる。

以下、中世以降と縄文時代とに分けて調査の詳細を報告します。(川添和暁)



万瀬遺跡遺構位置図 中世以降中心

調査の成果その1 中世以降の遺構と遺物

中世以後の主な遺構として、掘立柱建物跡^{ほったてばしらたてもの}10棟、柵列跡^{さくれつ}8条、井戸跡^{いど}2基、土坑墓^{どこうぼ}4基、炉跡^ろ3箇所が見つかりました。

掘立柱建物跡は19Ba区で4棟、19C区で6棟を確認しました。

300SBは桁行^{けたゆき}(建物の桁方向の柱間の数)4間、梁間^{はしらま}(建物の梁方向の柱間の数)1間以上、規模6.0m×3.0m以上の掘立柱建物跡です。柱穴005SP、007SPでは掘り方(人為的に掘り込んだ穴)内の北西側に大きな礫を配しており、柱の支えとして据えたものと思われます。

310SBは桁行3間、梁間1間、規模4.9m×2.1mの掘立柱建物跡です。320SBと重複しますが、前後関係は不明です。320SBは桁行2間、梁間1間、規模4.5m×1.5mの掘立柱建物跡です。『設楽町誌 村落誌』^{したらちょうし さんらくし}(2003年刊行)掲載の村落略地図^{さんらくりやくちず}には当遺構の付近に「蔵」「堂」の表記が見られ、建物の形態から310SB・320SBは「蔵」に相当するようです。柱穴036SKでは種別は不明ですが銅銭^{どうせん}が出土しました。

330SBは桁行3間、梁間2間、規模4.6m×3.9mの掘立柱建物跡です。柱穴051 SP・052 SP・053SP・054 SPの掘り方は同建物跡の他のものより大きく、この4基が建物の本体を構成し、他はひさし等を構成したものと考えられます。柱穴076SPでは柱痕の平面形が方形であることが確認されました。建物の形態から、330SBは村落略地図の「堂」に相当するものと思われます。

310SB・320 SB・330SBは、周辺で出土する陶器・磁器類^{とうき じき}から18世紀後半～19世紀に存続したものと思われます。

19C区で確認された6棟の掘立柱建物跡のうち、1600SB、1610SB、1620SB、1630SB、1640SBの5棟は規模約2.1～5.5mで住居としての利用が想定されます。周辺の出土遺物の時期は15世紀後半から19世紀に渡り、中世から近世にかけて存続した集落跡と考えられます。1630SBは1640SBと重なるため、1640SBをほぼ同じ位置で建て替える際、桁行を2間に変更して規模を若干拡大したものと考えられます。

1650SBは桁行5間、梁間1間、規模11.5m×2.8mの掘立柱建物跡です。柱穴1262SPでは柱痕跡^{はしらこんせき}が方形であることが確認されました。出土遺物から、1650SBは15世紀後半以後に建造され、17世紀後半から18世紀まで存在したものと考えられます。

19Ba区で2条、19C区で4条、19Aa区で2条の柵列跡を確認しました。集落内の区画などの用途を持っていたと考えられます。

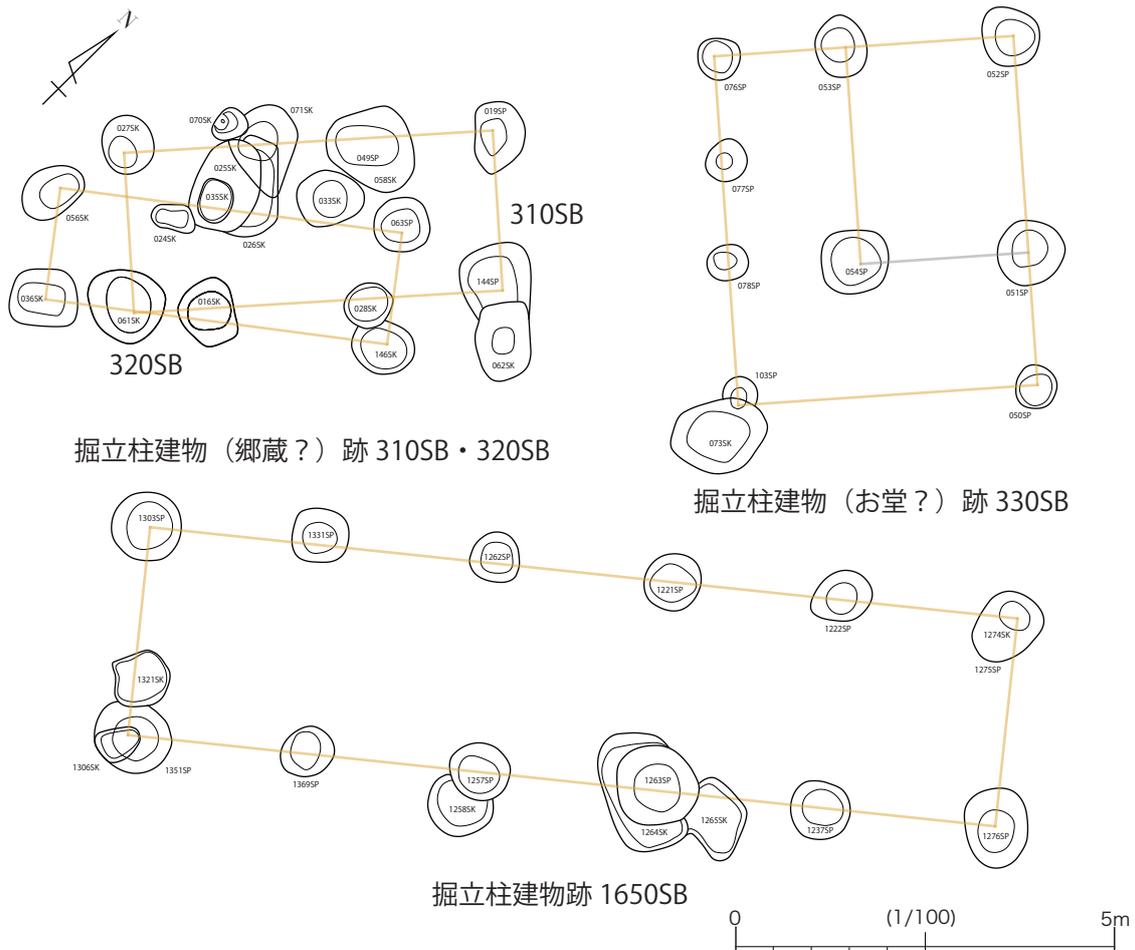
212SEは19Bb区南側に位置する井戸跡です。掘り方内に上部は縦板、下部は礫積

みで^{わく}枠を構成し、最下部には半分に割って加工した丸太材^{まるたざい}を敷いて土台とする構造で、掘り方は直径100～110cmの円形でほぼ垂直に落ち込みます。181SEは素掘りの井戸跡と考えられます。

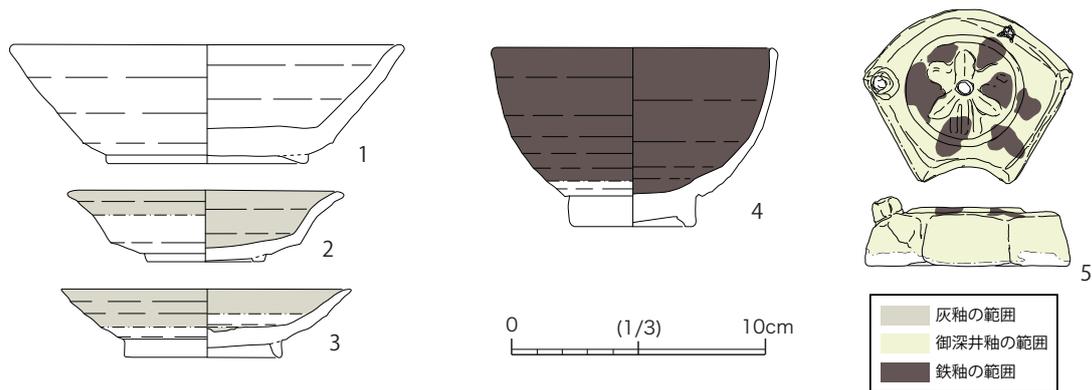
2178SZは隅丸方形の平面形を持つ土坑墓(穴を掘って埋葬しただけの簡素な墓)で、埋土から銅銭5枚が出土しました。2224SZはやや膨らむ隅丸方形の平面形を持つ土坑墓で、埋土から銅銭13枚、煙管^{きせる}1本以上のほか、骨片が出土しました。以上2基に加え、近代以降の掘削と考えられる溝2465SDでは銅銭6枚、煙管1本が出土し、墓坑を破壊して溝が掘り込まれたものと思われま

す。05SLは3.2m四方ほどの範囲で6度に渡って利用された炉跡で、遺構埋土内には陶器・磁器片のほか、炭化物^{たなかぶつ}と焼けた礫が多く含まれます。199SLは幅0.8m、長さ2.3m以上の溝状の炉跡です。1040・1116・1117・1174SLは1610SBの北東方に位置する炉跡群で、隅丸方形あるいは円形の土坑が4基連続しています。

今年度調査における中近世遺物の多くは19B区から19C区にかけて出土しており、



万瀬遺跡で見つかった代表的な掘立柱建物跡



万瀬遺跡出土遺物（中世・近世の陶器）

特に掘立柱建物跡周辺から多く出土します。それに対して19A区からの出土は少数にとどまります。中世に属する遺物としては山茶碗、伊勢型鍋、挿鉢、腰折皿、平碗、端反皿、内耳鍋などが挙げられ、19C区に多く、19B区ではごく少数です。近世に属する遺物としては天目茶碗、輪髻皿、端反碗、広東碗、鎧茶碗、腰鍔碗、挿鉢、水滴、銅銭、煙管などが挙げられ、銅銭のうち文字を確認できたものは6枚、全て寛永通宝です。

中世以降の遺物のうち、全体が復元できた陶器の一部を掲載しました。1は土坑034SXから出土した13世紀中葉の山茶碗です。復元口縁部径15.6cm、高台径8.0cm、器高4.7cmで、渥美湖西型です。2は土坑1265SKから出土した15世紀後半の灰釉腰折皿です。復元口縁部径10.9cm、復元高台径4.9cm、器高2.8cmです。3は19B区表土から出土した18世紀代の輪髻皿（内面に環状の無釉部分のある皿）です。復元口縁部径11.5cm、高台径6.3cm、器高2.7cm。4はC区の掘立柱建物を構成する柱穴1263SPから出土した17世紀後半から18世紀の端反碗です。復元口縁部径11.3cm、高台径5.0cm、器高7.1cm。5は井戸212SEから出土した17世紀後半の水滴（書道に使う水差し的一种）です。底幅8.3cm×6.3cm、器高2.8cm、扇面形で上面には「丸に立ち沢瀉」の意匠があり、底部分を除き御深井釉が掛けられています。

今年度調査では、以下のようなことが分かりました。

19B区では中世に属する遺物がごく少ないため、本格的に利用され始めたのは近世、17世紀以後と考えられます。19C区では13世紀には人間活動があったと思われませんが、一時痕跡が途絶える空白期間が存在します。その後、15世紀後半以降からは連続的な使用が想定でき、18世紀頃の19C区には倉庫の可能性のある大型建物とともに住居が並ぶ、集落の中心域の景観が復元されます。土坑墓が点在する同時期の19A区には墓地としての利用が考えられ、やや時代の下った18世紀後半から19世紀にかけ



Ba区 310SB・320SB・330SBと105SL(上が西)



Ba区 105SL 充填された礫検出状況(東より)



Bb区 181SE 井戸枠検出状況(南西より)



Bb区 181SE 井戸内水滴出土状況(南西より)



C区 1650SB(上が北西)



C区 1174SL 礫など検出状況(南西より)



C区 1265SK 灰釉腰折皿出土状況



Aa区 2224SZ 銅銭・煙管など出土状況(南西より)

て、集落の中心から山側へ向かった19B区には堂や蔵などが存在したと考えられます。
(河嶋優輝)

調査の成果その2 縄文時代の遺構と遺物

19Ba区と19Bb区の境付近には谷の地形が見つかり、^{こくしよく}黒色の埋土中からは縄文時代後期中葉から^{こうきちゆうよう}弥生時代前期(今から3,500~2,500年前)の^{どき}土器片や^{せつき}石器がまとまって出土しました。この土からは同時に近世陶器片も出土する上、14区では中世以降の遺構がこの土に覆われていたのです。この黒色土は近世以降に堆積したもので、縄文・弥生時代の遺物は、周囲から二次的に混入してきたものと考えられます。

遺跡の北側、19Aa区・Ab区・C区にまたがる50×60mの^{そうき}範囲では、縄文時代早期前半(今から約1万年前)を主体とする集落跡が見つかりました。見つかった遺構は、^{ろあな}炉穴4基(1572SL・2116SL・2127SL・2445SL)、^{しゅうせきろあと}集石炉跡4基(2400SL・2447SL・2448SL・2449SL)、^{たてあな}竪穴建物跡6基(1700SI・1710SI・1720SI・1730SI・1740SI・2460SI)と、^{すば}捨て場と考えられる^{いぶつほうがんそう}遺物包含層(2500SX)です。遺物包含層は径1cm弱の礫を多く含むに^{はいおうかつしよくねんど}ぶい灰黄褐色粘土層で、県道を挟んで19C区と19Ab区を挟んだ範囲に広がっています。包含層の斜面上端、19C区東端では、竪穴建物跡が重複して計5基確認されました。いずれも径4~5mほどの多角形となる平面形で、床の断面形は皿状となっています。中央には炉跡はなく、建物跡の底面や縁には^{はしらあな}柱穴の跡がいくつも見つかりました。今回の調査では先に築かれた竪穴建物がある程度埋没してから、次の竪穴建物が構築された様子を確認することができたのです。

炉穴は平面形が^{ちやうだえんけい}長楕円形となっているものが多く、^{ちやうじく}長軸1~2m弱・^{たんじく}短軸0.6~0.8mほどの大きさです。使われた時の^{ひねつ}被熱部分および^{まいど}埋土の状況などから、いずれも何回も使われていた様子を確認することができました。2127SLは元来はトンネル構造を持つ^{えんどうつき}煙道付炉穴でしたが、その後^{いたいし}板石を入れるなどして構造を変えてさらに繰り返して利用されたようでした。

集石炉跡は4基ありますが、いずれも竪穴建物跡2460SIの埋土内で見つかりました。建物跡としての利用が終了して、ある程度自然に埋まった^{くぼち}凹地状のところを利用して、炉が繰り返して作られています。炉跡はいずれも長径0.6~0.8m程度の浅い凹地状を呈するもので、焼土・炭化物が多く含まれていました。

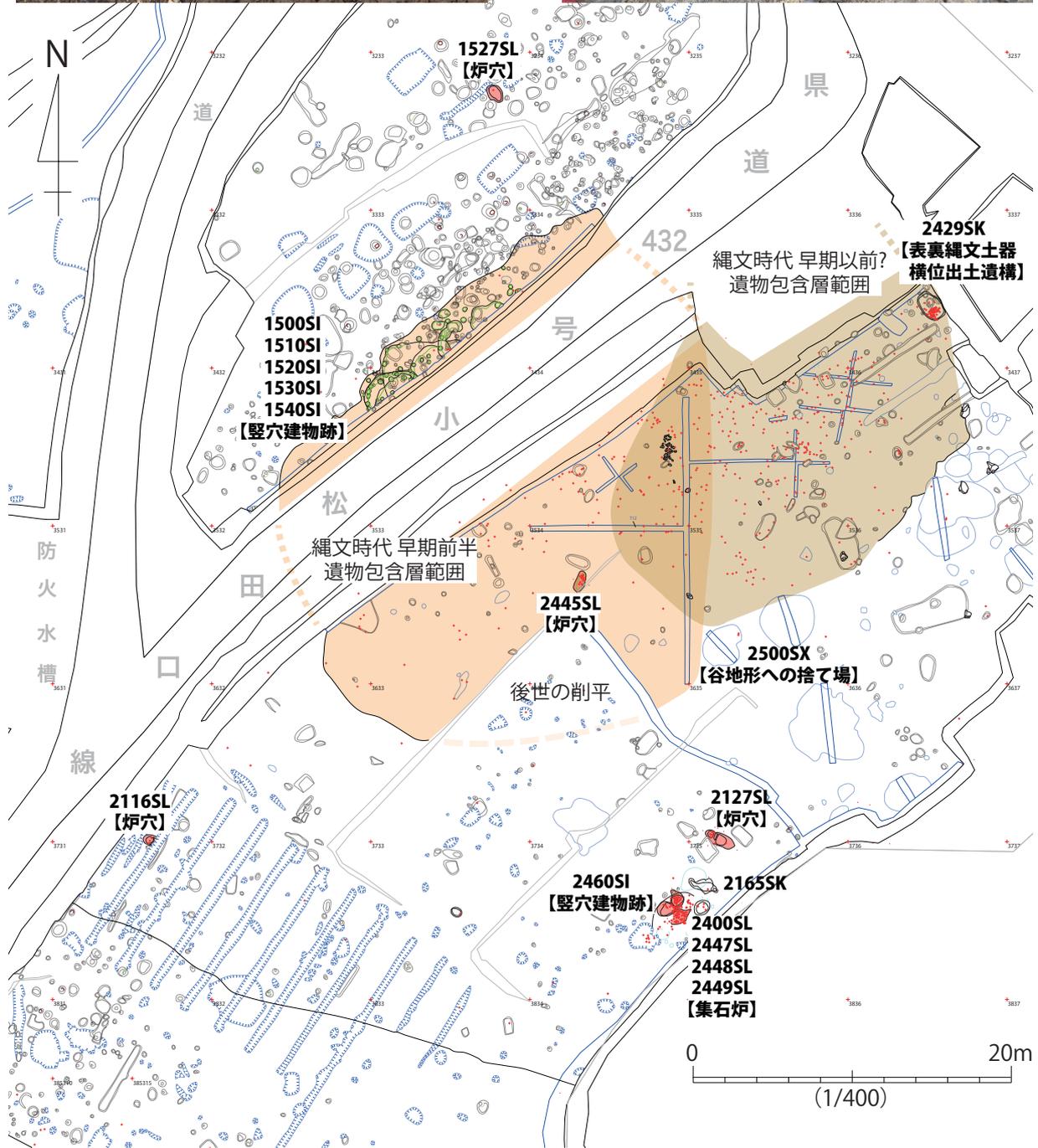
谷地形の内では、土器・石器を多く含む遺物包含層を確認しました。ここからは上に記した遺構同様に、^{おしがたもん}早期前半の押型文土器が出土しました。包含層内には、径



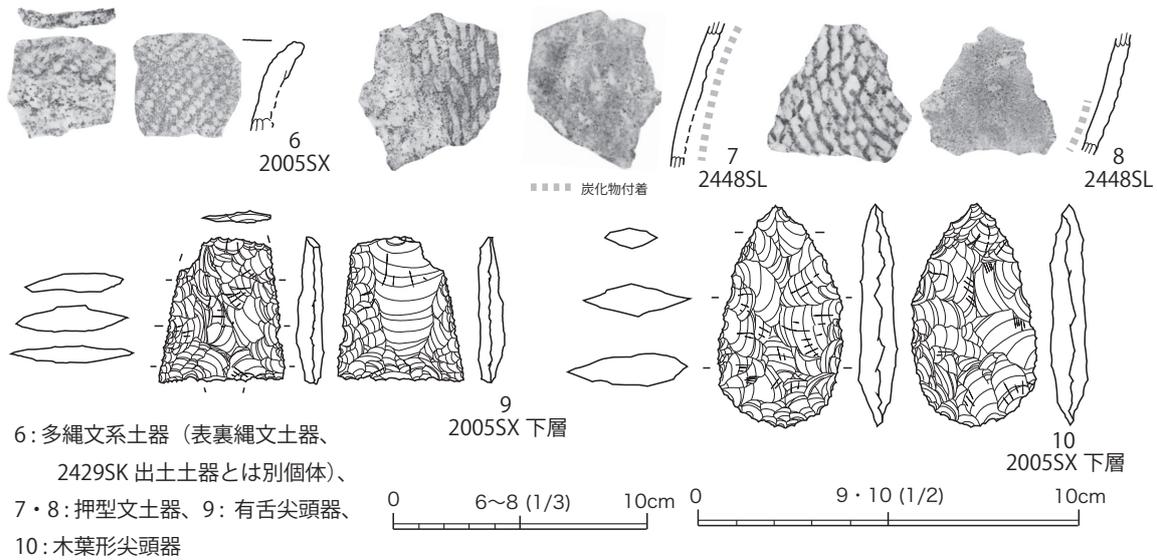
C区 1527SL 押型文土器出土状況(南東より)



Ab区 2429SK 表裏縄文土器出土状況(北東より)



万瀬遺跡遺構位置図 縄文時代早期前半中心



6: 多縄文系土器（表裏縄文土器、
2429SK 出土土器とは別個体）、
7・8: 押型文土器、9: 有舌尖頭器、
10: 木葉形尖頭器

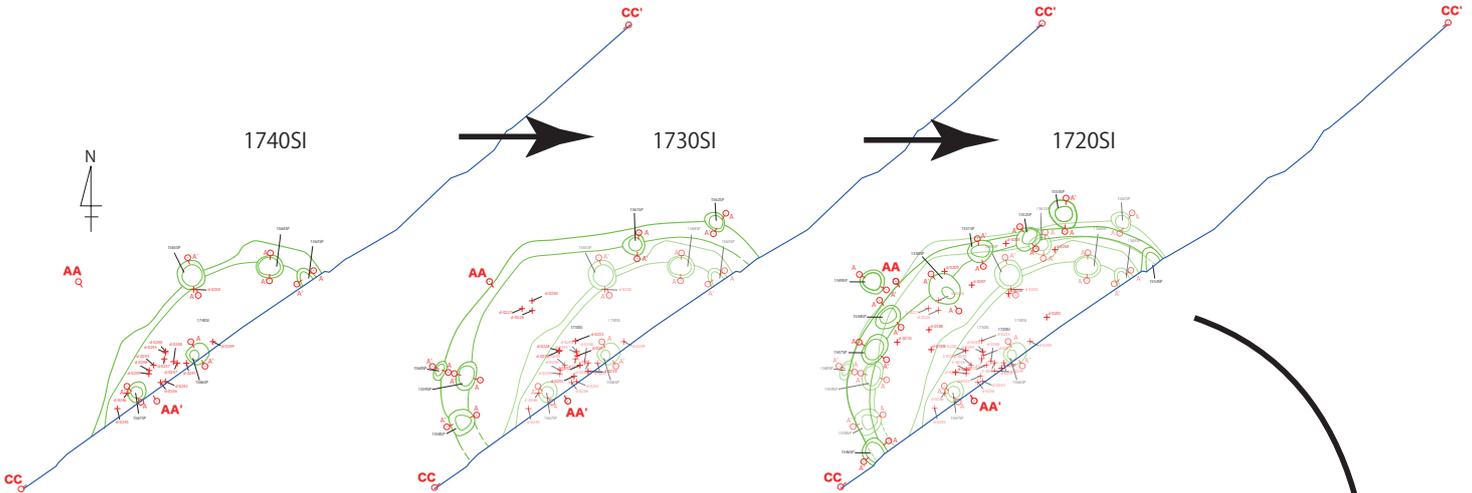
万瀬遺跡 縄文時代早期前半以前の出土遺物

20cm 程度の角礫の固まっている場所があり、人為的な利用後に廃棄されたものではないかと考えられます。谷地形では、礫を多く含むにぶい灰黄褐色粘土層の下に、礫を含まない褐色粘土層の堆積があり、その範囲は谷地形対岸の北側に向かって広がっています。この堆積土からは、押型文土器のほか、多縄文系土器も出土しています。

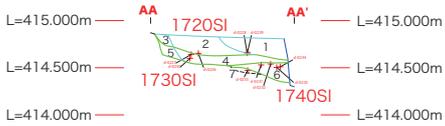
礫を含まない褐色粘土層の範囲北端からは、注目すべき遺構が見つかりました。2449SK は大きき 2.0×1.2m の浅い凹地で、もともとはより古い段階の倒木による凹地があったところでした。その凹地内から、表裏縄文土器が一個体分、横になって潰れた状態で出土したのです。底部はないものの、口縁部から胴部下半までよく残っています。まだ、接合・復元作業が行われていませんが、器の厚さが 5mm 程度と薄手で、器形などから、草創期に遡りうるのかもしれませんが。

出土遺物は、早期前半の大川式をはじめとする押型文土器や撚糸文土器も見つかっています。2449SK 出土土器の様に多縄文系土器群のなかには草創期末まで遡りうるものもあるかもしれません。石器は、石鏃・礫器・剥片石核類・磨石敲石類・石皿台石類が出土しています。また、谷地形 2500SX の下層からは、縄文時代草創期前半に属する有舌尖頭器と木葉形尖頭器がそれぞれ 1 点ずつ出土しています。このような尖頭器は、川向東貝津遺跡で数多く出土していますが、草創期前半頃の当地は、狩猟の場となっていたものと考えられます。

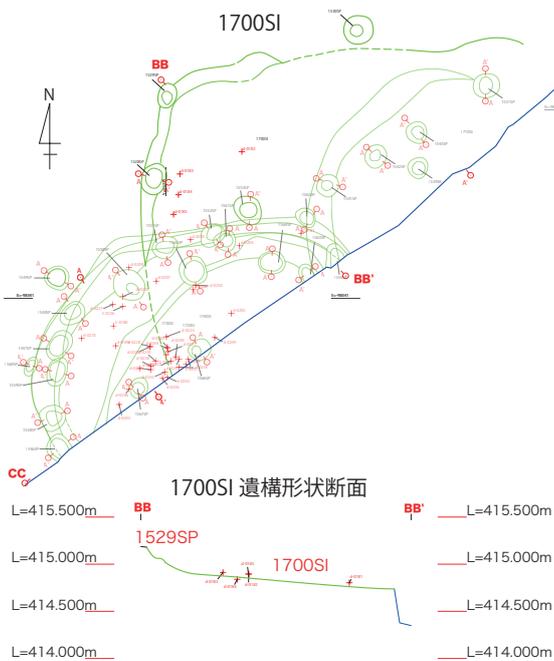
万瀬遺跡の調査では、縄文時代早期前半の集落跡全体が見つかりました。竪穴建物構築の場の重複や炉跡への利用など、当時のヒトたちは活動する内容により場を定めて営みをしていたことが分かる、とても貴重な調査成果となりました。(川添和暁)



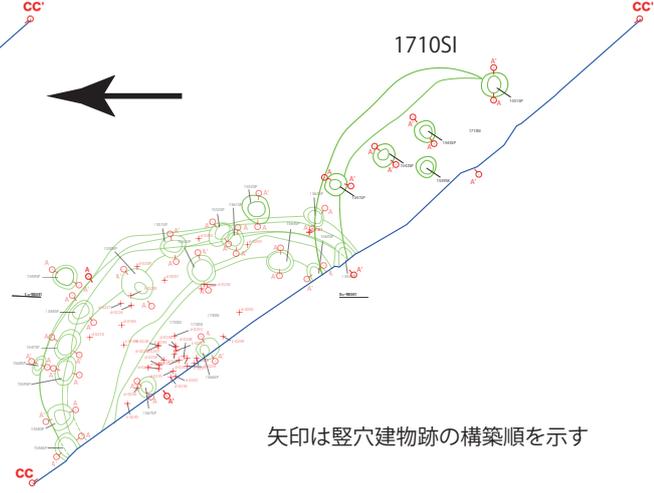
1720SI・1730SI・1740SI 土層断面



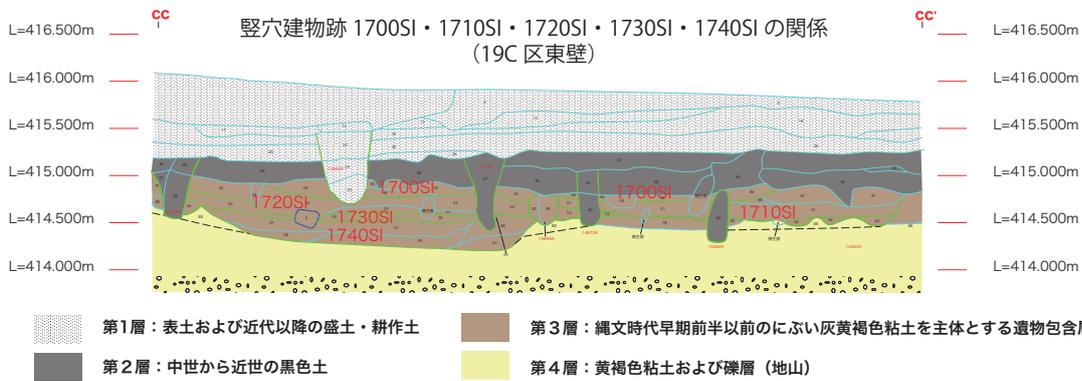
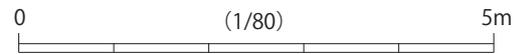
1. 10YR4/2 灰黄褐色粘土シルト層 10YR5/4にふい黄褐色粘土質シルトブロックを少量含み、径1~2cmの礫を多く含み、大礫の角礫を含む。(1720SI)
2. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト層 径1~2cmの礫を多く含み、中礫の角礫を多く含む。炭化物粒を多く含む。(1720SI)
3. 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト層 10YR5/4にふい黄褐色粘土質シルト粒を少量含み、径1~2cmの礫を多く含む。炭化物粒を多く含む。(1720SI)
4. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト層 10YR5/4にふい黄褐色粘土質シルトブロックを少量含み、径1~2cmの礫を多く含む。炭化物粒を多く含む。(1730SI) (東壁255層)
5. 10YR4/4 褐色粘土層 10YR5/4にふい黄褐色粘土質シルト粒を含み、径1~2cmの礫を多く含む。炭化物粒を多く含む。(1730SI)
6. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト層 10YR5/4にふい黄褐色粘土質シルトブロックをごく少量含み、径1~2cmの礫を多く含み、大礫の角礫をごく少量含む。炭化物粒を多く含む。(1740SI) (東壁257・59層)



1700SI 遺構形状断面



矢印は竪穴建物跡の構築順を示す



万瀬遺跡 縄文時代早期前半竪穴建物跡 (1700SI・1710SI・1720SI・1730SI・1740SI) の変遷

放射性炭素年代測定試料(上)と、年代測定結果(下)

測定番号	調査区 グリッド	遺構・取上番号など	試料データ	資料の詳細	前処理
PLD-40567	19Aa 3731	遺構：2116SL (炬穴) 遺物番号：d-0162 日付：20191113	種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry		超音波洗浄、有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-40568	19Aa 3735	遺構：2448SL (集石炉跡) 遺物番号：d-0552 日付：20191220	種類：土器付着炭化物 部位：胴部内面 状態：dry	押型文土器 (本稿 22 頁 上図の 7)	超音波洗浄、有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-40569	19Ab 3336	遺構：2429SK 遺物番号：d-0788・0789 日付：20191224	種類：土器付着炭化物 部位：胴部外面 状態：dry	表裏縄文土器 (本稿 21 頁 上右写真)	超音波洗浄、有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-40570	19C 3223	遺構：1527SL (炬穴) 日付：20191129	種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry		超音波洗浄、有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-40571	19C 3443	遺構：1720SI (竪穴建物跡) 日付：20191126	種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry		超音波洗浄、有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-40572	19C 3433	遺構：1730SI (竪穴建物跡) 日付：20191205	種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry		超音波洗浄、有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-40573	19C 3433	遺構：1740SI (竪穴建物跡) 日付：20191205	種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry		超音波洗浄、有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正 用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲		^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-40567	-31.95 ± 0.36	9427 \pm 40	9425 \pm 40	8756-8696 cal BC (40.9%) 8683-8640 cal BC (27.3%)	8807-8617 cal BC (95.4%)	10705-10645 cal BP (40.9%) 10632-10589 cal BP (27.3%)	10756-10566 cal BP (95.4%)
PLD-40568	-26.90 ± 0.23	9455 \pm 35	9455 \pm 35	8791-8705 cal BC (61.1%) 8670-8656 cal BC (7.1%)	8836-8628 cal BC (95.4%)	10740-10654 cal BP (61.1%) 10619-10605 cal BP (7.1%)	10785-10577 cal BP (95.4%)
PLD-40569	-22.95 ± 0.19	8331 \pm 27	8330 \pm 25	7471-7444 cal BC (18.0%) 7439-7421 cal BC (10.7%) 7415-7357 cal BC (39.5%)	7491-7331 cal BC (95.4%)	9420-9393 cal BP (18.0%) 9388-9370 cal BP (10.7%) 9364-9306 cal BP (39.5%)	9440-9280 cal BP (95.4%)
PLD-40570	-25.93 ± 0.22	9378 \pm 31	9380 \pm 30	8711-8616 cal BC (68.2%)	8741-8569 cal BC (95.4%)	10660-10565 cal BP (68.2%)	10690-10518 cal BP (95.4%)
PLD-40571	-26.11 ± 0.21	9502 \pm 31	9500 \pm 30	9109-9086 cal BC (9.4%) 9040-9031 cal BC (3.2%) 8837-8750 cal BC (55.6%)	9120-9005 cal BC (29.4%) 8917-8899 cal BC (2.0%) 8868-8716 cal BC (63.9%)	11058-11035 cal BP (9.4%) 10989-10980 cal BP (3.2%) 10786-10699 cal BP (55.6%)	11069-10954 cal BP (29.4%) 10866-10848 cal BP (2.0%) 10817-10665 cal BP (63.9%)
PLD-40572	-26.55 ± 0.15	9569 \pm 34	9570 \pm 35	9123-9000 cal BC (40.0%) 8920-8834 cal BC (28.2%)	9141-8796 cal BC (95.4%)	11072-10949 cal BP (40.0%) 10869-10783 cal BP (28.2%)	11090-10745 cal BP (95.4%)
PLD-40573	-28.90 ± 0.12	9603 \pm 35	9605 \pm 35	9151-9117 cal BC (11.4%) 9072-9058 cal BC (4.0%) 9013-8911 cal BC (34.1%) 8905-8845 cal BC (18.8%)	9188-8822 cal BC (95.4%)	11100-11066 cal BP (11.4%) 11021-11007 cal BP (4.0%) 10962-10860 cal BP (34.1%) 10854-10794 cal BP (18.8%)	11137-10771 cal BP (95.4%)

※年代測定は株式会社パレオ・ラボによる



Aa区 2460SI内 集石炉跡群埋土検出(北西より)



Aa区 2460SI内2400SLなど集石炉跡群検出(北西より)



Aa区 2460SI内2447SL 集石炉跡検出(南西より)



Aa区 2460SI完掘(東より)



上:C区 1700SI完掘および1710SI・1720SI検出(南西より)
 中:C区 1720SI・1730SI・1740SI完掘(南より)
 下:C区 1720SI・1730SI・1740SI完掘(南東より)



上:Aa区 2127SL 上層土層断面(南より)
 中:Aa区 2127SL 下層土層断面(南より)
 下:Aa区 2127SL 完掘(南東より)

講演資料 信州の遺跡・遺物からみた設楽地域

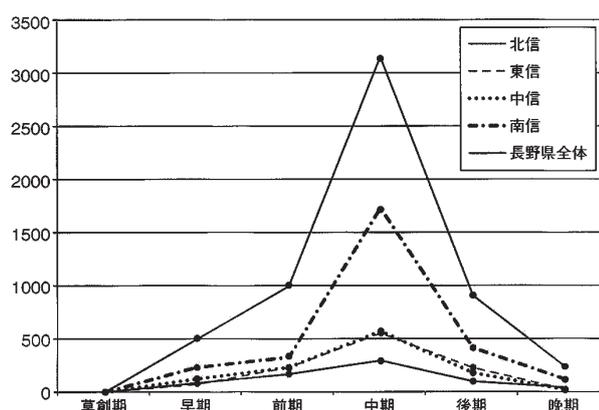
長野県埋蔵文化財センター 綿田弘実

1 信州の縄文時代遺跡数の変遷

『長野県史考古資料編』(以下『県史』、長野県史刊行会1981・1982)に掲載された遺跡地名表、及び市町村別時期別遺跡数一覧表に基づき、北信・東信・中信・南信四地区の遺跡数変遷を比較してみる。刊行後35年を経て、遺跡数の増減や、発掘調査によって時期が判明した遺跡が少なくないが、ここでは統計上の整合性を重視して、記載のままに扱う(表1・図1)。

『県史』には時期不明2142遺跡を含めて7940遺跡が記載されている。北信地域は981遺跡を数え県内の約12

	草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	不明
北信	15	84	183	290	98	46	264
東信	6	74	245	556	222	28	512
中信	6	129	232	585	179	34	512
南信	13	228	338	1,727	405	123	836
長野県全体	40	515	998	3,158	904	231	2,124
北信比率(%)	38	16	18	9	11	20	12



上:表1 長野県縄文時代遺跡数の変動
下:図1 長野県縄文時代遺跡数の変動
(『長野県史考古資料編』より作成)(綿田2017より)

%、東信は1643遺跡約21%、中信は1677遺跡約21%、南信は3670遺跡約46%を占める。複数時期の遺跡を、1時期1遺跡とした四地域の遺跡数の推移は、いずれも中期を頂点とする山形の曲線を描く。中期前後の変動をみると、前期から中期への増加率と、中期から後期への減少率は、千曲川流域の北・東信地域では増加・現象とも低い。一方、木曾川・天竜川流域の中・南信では中期への増加、後期への減少とも変動の幅が大きい。愛知県でも、海岸地域と山地地域、あるいは東西の地域によって、遺跡数の変遷に差があることであろう。

2 信州に来た東海地方の縄文土器

『総覧縄文土器』(2008)に掲載されている、時期別の縄文土器様式の分布図を見ると、長野県はちょうど東西日本の土器様式分布圏が交わる場所に位置することがわかる。この状況は、縄文前期以降県内の南北差として現れる。そして縄文中期には、長野県と隣接する地域を舞台に多くの土器様式の分布圏が重なりあって、県内で中期前半では4地域、後半では5地域ほどの地域差が現れる。

縄文時代早期後葉には、粕畑式以降の東海系土器が、長野県で主体的な絡条体圧痕文土器とともに県南に広く分布する。特に粕畑式は県北までおよぶ。前期初頭には、厚さ2～3mmときわめて薄く作った尖底のオセンベ土器が伊那谷に伝わる。この特徴を受け継ぎ、伊那谷から松本盆地に尖底で縄文を付けず、胎土に繊維を含まない中越式が現れ、関東系の縄文施文土器と共存する。

前期後半には、関東・中部地方を本拠地とする諸磯式土器を主体に、西日本系の北白川下層式などの仲間、中期には北裏C式、山田平式、北屋敷式などが分布する。東海地方が本場である比較的薄手の土器は、縄文中期の中頃くらいまで長野県の南西部、伊那・木曾地方から松本盆地までかなり出土している。中期後半の諸型式は下伊那・木曾地方に分布する。こののち、弥生文化の波及期である晩期後半の条痕文系土器は分布を広げ、土器棺として出土することも多い。

3 長野の竪穴住居・敷石住居の変遷

設楽ダム関連遺跡では、縄文草創期後半・中期・後期の竪穴住居跡(最近は竪穴建物跡とも呼ぶ)を見せていただいた。遺物と違って、遺構は地面に作り付けた施設であるから、人びとが集団で移動して来ないと他地域の特徴は伝わらない。図示した縄文中・後期の資料(図2・図3)には山梨県の例も含まれているが、ここでは主に長野県の事例に触れ、設楽地域との比較材料としたい。

草創期・早期 草創期後半、長野県上松町お宮の森裏遺跡(表裏縄文期)には2～3時期にわたる炉のない竪穴9軒がある。早期押型文期には炉がない小規模な住居が普及する。飯田市美女遺跡(立野式期)に住居11軒、塩尻市向陽台遺跡(沢式期)に長軸8.8mの大形住居を含む住居4軒、大町市山の神遺跡(細久保式期)では住居12軒が検出されている。屋外炉を含む集石、焼土集中が伴う。早期後葉の条痕文期には、塩尻市堂の前遺跡には住居4軒と長径13mの大形住居がある。茅山上層式期以降では、茅野市高風呂遺跡(絡条体圧痕文期)の住居2軒は4本支柱穴と壁柱穴をもつが炉は見られない。築北村向六工遺跡(絡条体圧痕文期)で地床炉をもつ住居5軒があり、1軒には定置式の台石がみられた。

前期 前期初頭、長野県には円形・方形プランがある。前葉の中越式期の住居は円形・楕円形・隅丸方形で4本柱穴が最も多い。長径6～7mの大形、6本柱穴もある。周溝がめぐる住居が多く、中央付近に地床炉をもつ。中葉の有尾・黒浜式期の住居は隅丸方形で2～8本柱穴、埋甕炉をもつ。後葉の諸磯a・b式期、住居は長径3～4m

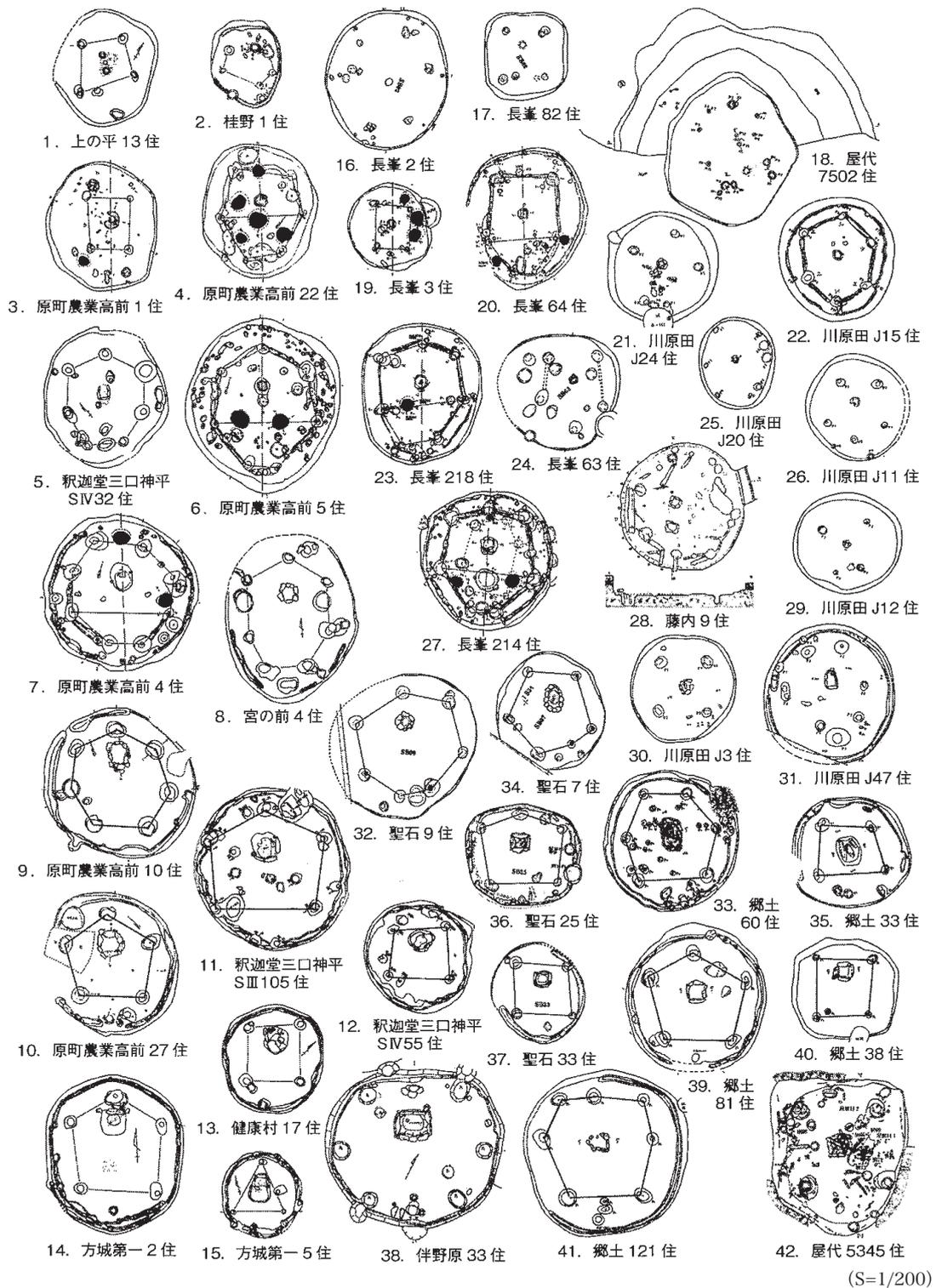
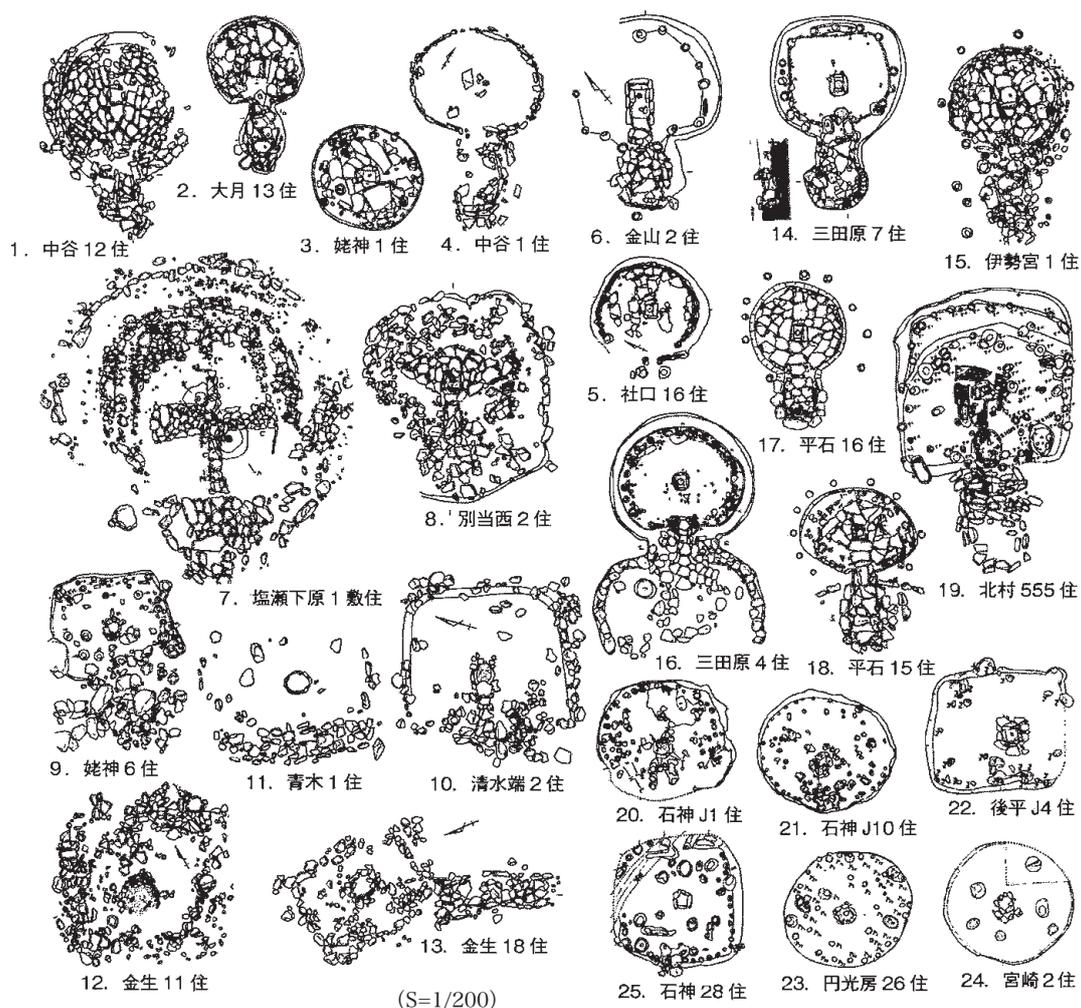


図2 中央高地の縄文中期住居(綿田2012bより)



(1: 曾利V 2・14: 称名寺 3~5・15・16: 堀之内1 6~8・17・18: 堀之内2 9・19: 加曾利B1
10・20: 加曾利B1~2 11・21・22: 曾谷~安行II 12・13・23~25: 大洞 BC・C1)

図3 中央高地中期~晩期の敷石住居(綿田2012bより)

と小形が多いが、7m超の大形が伴う。4本主柱、大形には6・7本主柱があり、地床炉をもつ。前期全般を通じて平面形には方形系統と円形系統があり、前者を関東地方、後者を北陸・東海・西日本との関連とみる意見がある。方形系統が主流だった前半期から、黒浜式期以降は円形系統に傾斜し、末葉の諸磯c・十三菩提式期には円形に統合される。

中期 中期前半、住居構造は定型化する。五領ケ台式期頃(図2の1・2・16~18)までは前期後半の形態を受け継ぐが、炉が竪穴中央付近に固定化される。長野県千曲市屋代遺跡群では周堤を廻らす住居が検出され、床面から最上部まで深さ1.7mの例があった(図2の18)。中期前半型(貉沢式~曾利I式期、図2の3~11・19~35)の住居は出入口と炉を結んだ線を主軸に、4・5・7本主流の太い主柱穴を左右対称に配置

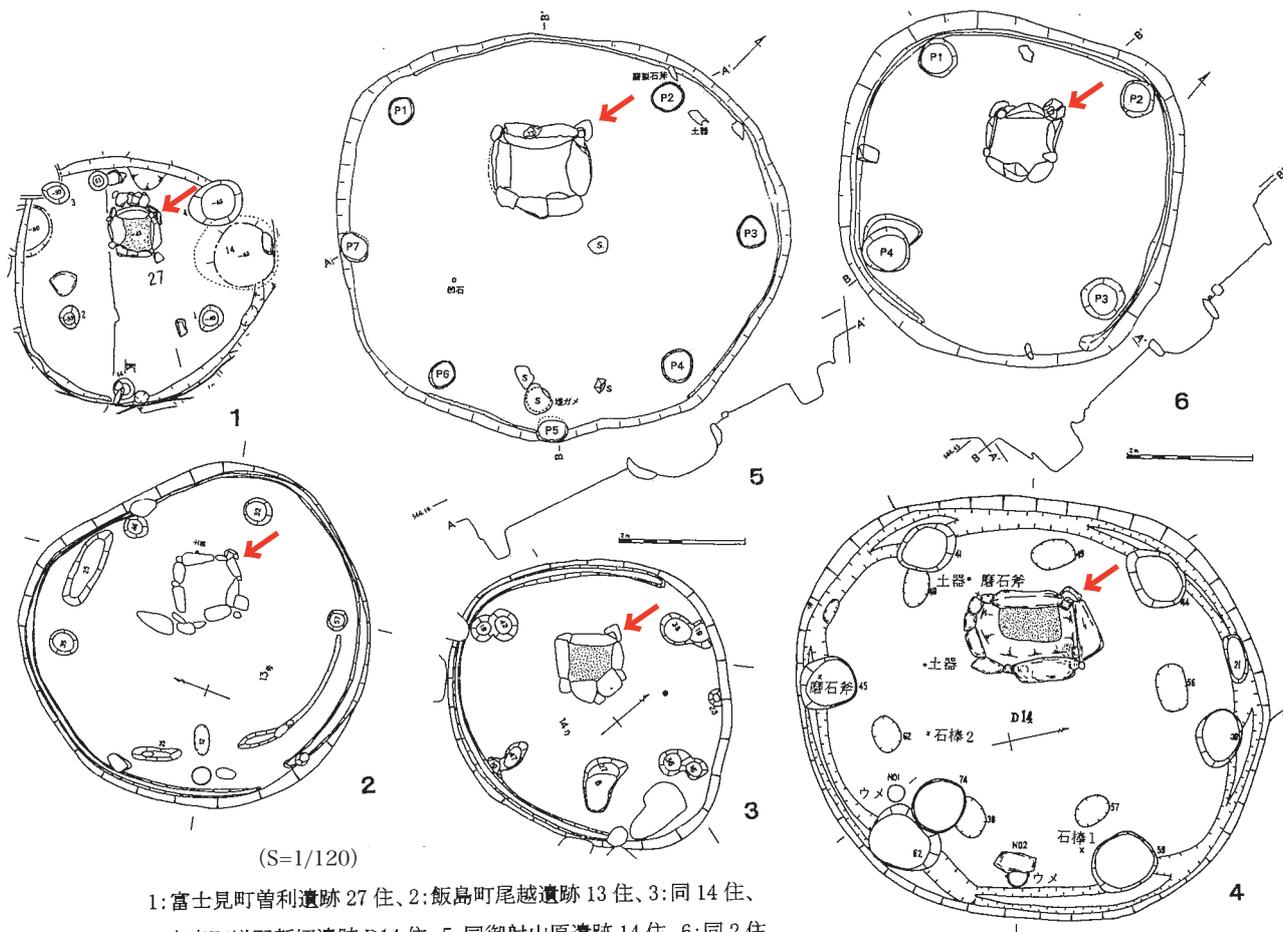
した円形・楕円形である。中期後半型(曾利Ⅱ式～Ⅴ式期、図2の9～15・36～41)は規模に応じて3・4・5本主体の楕円形、炉は奥壁寄りで切り炬燵状の方形石囲炉となる。伊那盆地の中期後半には「円形6本支柱型」、「円形5本支柱型」があり、奥壁が直線的なプランの4・6本支柱穴は「辻沢南型住居址」と呼ばれる。

炉形態は前期末～新道式期:埋甕炉、新道式～藤内式期:石囲炉、藤内式～曾利Ⅰ式期:石囲炉・埋甕炉、曾利Ⅰ～Ⅴ式期:石囲炉である。曾利式期の石囲炉は、Ⅰ式期:石を平置きした長方形・楕円形、Ⅱ～Ⅳ式期:石を斜めに立てた大形方形、Ⅴ式期:石を直立させた小形方形に変遷する。長野県の八ヶ岳南麓、唐草文系土器分布域の松本盆地でもほぼ同じ歩調がたどれるが、伊那・木曾地方では地域差が指摘されている。貉沢式から曾利Ⅰ式期に屋内貯蔵穴を有する住居が見られる(図2の3・4・6・7・19・20・23・27、図中の黒塗り部分)。

中期後半には、埋甕のほか炉辺石棒や石柱・石壇など、石を用いた屋内祭祀施設が現れ、長野県には事例が多い。その一つに、石囲炉の外側の一角にミニチュアの石囲を設けた、「副炉」が諏訪地方から下伊那地方に見られる。現在20例程度と推定する希少な施設である。副炉が設楽地域に伝わっていることは注目すべきことであり、類例を図示する(図4)。

中期末葉 加曾利ⅤⅢ式土器の進出が顕著になると千曲川流域に位置する長野県東北信地方では遺跡数が急増し、敷石住居が出現する。屋代遺跡群は柄鏡形敷石住居初源期の例である。五角形住居の形態と円形住居の小張出部が柄鏡形発生的重要因素と考えられている。SB5345(図2の42)は炭化した壁板材が掘込みに沿って五角形に遺存し、出入口部は開けていた。中南信地方では敷石住居の出現はやや遅れる傾向があり、張出部がみられない敷石住居や敷石のない在来型の住居が主流となる遺跡もある。

後期・晩期 称名寺式期以降、加曾利ⅤⅠ式期には敷石住居が主流となる。長野県小諸市三田原遺跡7号住居は深い張出部の側壁に石積みを施し、向かって左側に入用用の石段を設けている(図3の14)。堀之内2式期には、集落の高所にあり大型で周堤礫を廻らせるもの、張出部を拡大して石垣状に礫を積むものなど、他とは格差のある住居も現れる(図3の7)。この時期、炉を中心に十字形・三角形・菱形に敷石を敷設して床面に空間を残す例があり、間取り・居住空間を推測させる(図3の7・8)。無敷石部に炭化した板材が遺存した例がある(図3の19)。長野県では加曾利ⅤⅡ式期以降竪穴住居に戻り、晩期に継続する(図3の20～22)。晩期の竪穴住居は検出例が極端に減少する。長野県では長野市宮崎2号・千曲市円光房26号(図3の23・24、



(S=1/120)

- 1: 富士見町曾利遺跡 27 住、2: 飯島町尾越遺跡 13 住、3: 同 14 住、
4: 高森町増野新切遺跡 D14 住、5: 同御射山原遺跡 14 住、6: 同 2 住

図4 副炉付石囲炉がある住居跡(赤矢印で示した部分が副炉)

ともに大洞BC式期)が円形、富士見町大花1・2号(晩期初頭)、小諸市石神遺跡で方形住居(図3の25、大洞C1式中心)が見られるが、それぞれ隣接する新潟、関東の系譜を引くと考えられる。

4 下伊那地方の縄文中期末～後期初頭土器と西地・東地遺跡

下伊那地方を中心に縄文中期末葉、加曾利EⅢ式土器に並行する時期に、縄(紐)の結び目を縦に回転した「結節縄文」を地文に施すことを特徴とする、「親田式土器」が現れる(図5)。このような特徴をもつ土器は、北は長野県の諏訪地方、南は岐阜県、愛知県、静岡県に広がっている。この型式は、結節縄文の変化から古・中・新3段階に区分されているが、新段階が中期終末で終わるのか、後期初頭に続くものなのか、課題となっていた。長野県側では遺跡が極めて少なくなる時期であり、長らく根拠になる事例がなかったが、西地・東地遺跡14B区1305SI3の石囲炉に敷かれた土器によって、見通しが付いた。炉の中には5個体分の土器破片が敷き詰められ、1個体は称名

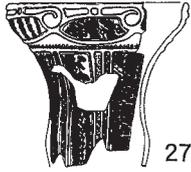
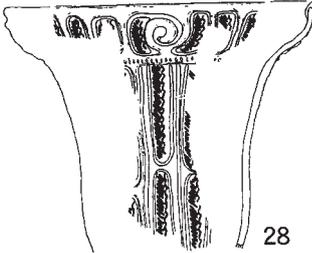
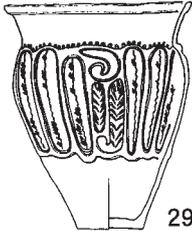
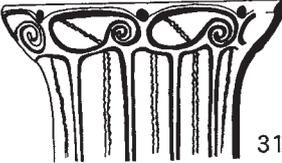
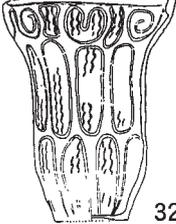
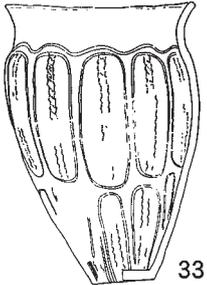
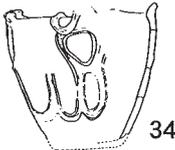
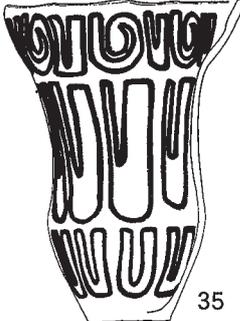
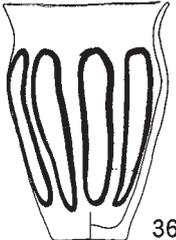
	唐草文タイプ	関東加曾利E式系タイプ	下伊那Bタイプ	下伊那Cタイプ	地文
IV期古 (親田式)	 26	 27	 28	 29	縄文+結節縄文
IV期中 (親田式)	 30	 31	 32	 33	結節縄文
IV期新 (親田式)	 34		 35	 36	なし

図5 下伊那唐草文土器 編年図(飯田市上郷考古博物館2005より)

寺式古段階、3個体は沈線で楕円文やU字状文を描き、地文がない親田式新段階の土器、1個体は文様意匠がなく、結節部分だけが施文された土器である。この組み合わせから、親田式新段階が後期初頭に残る可能性が高まった。同時に、信州系土器が明確に用いられていることも認められた。

5 山と平地の縄文土器組成の違い

山岳洞窟での狩猟活動を雄弁に物語る遺跡が、北信地方の東側、群馬県境付近にある湯倉洞窟である。標高約1400mの亜高山帯にあり、間口約3.5m、奥行約4m、高さ約4.7m、底線より外側の落盤線までの居住面積は19㎡を測る。層厚2.5m程度の灰と炭の中に12の文化層があり、最下層XII層の草創期からV層の後期まで約1.6mが縄文時代の層序である、洞窟自体の広さが径4m級の住居と同じ広さである。動物骨の出土量は全国一といわれる。

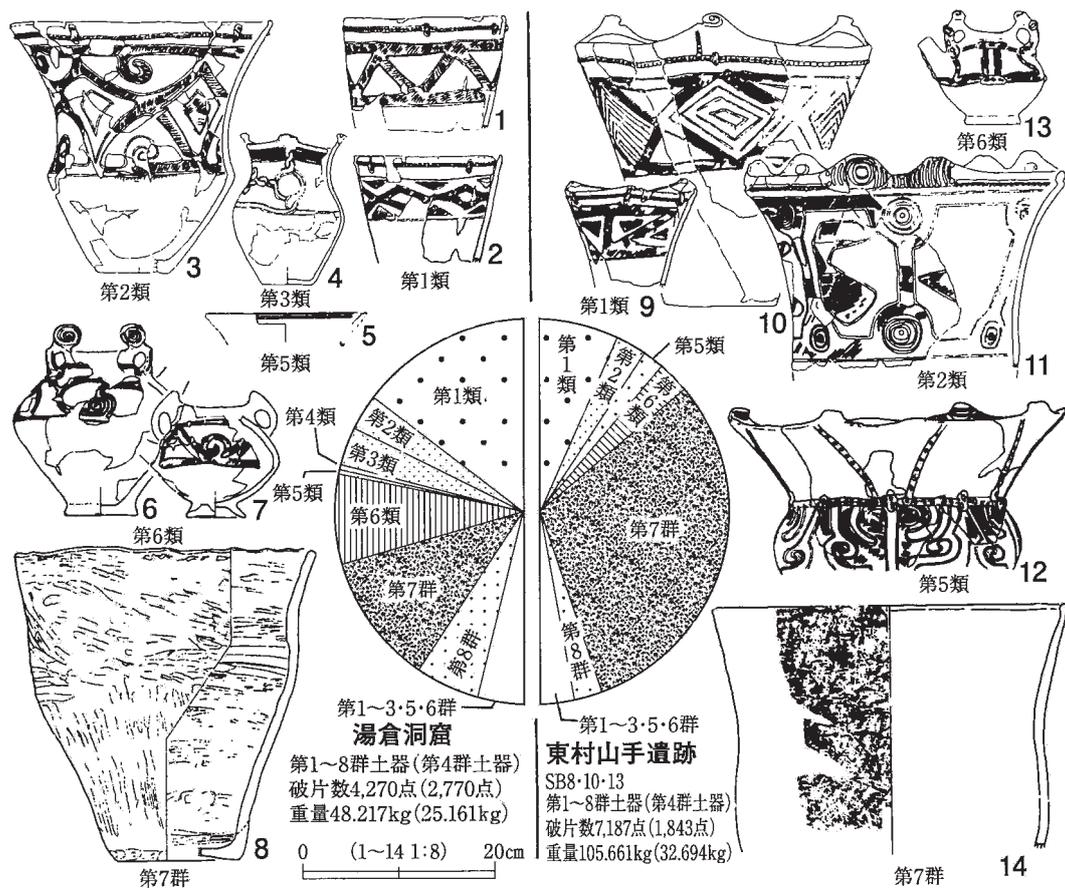


図6 山と里の縄文後期土器組成比較 (綿田2013より)

縄文時代の主要な脊椎動物遺体は、主要四肢骨の計数からニホンザル9、ツキノワグマ40、ニホンジカ249、同幼獣16、イノシシ78、同幼獣15、カモシカ35である。ノウサギ、タヌキなどの中形獣は積極的な捕獲対象となっていない。石器は石鏃1750、尖頭器17、搔器8、削器143、石匙34、石錐31のほか、少数の打製石斧、磨製石斧、磨石、砥石などで、大部分が狩猟具と動物解体・加工具である。

縄文後期前葉、堀之内2式期の土器を平野部の遺跡と比較すると、有文・無文土器比率の逆転、特定器種の欠落、深鉢法量の差など明瞭な相違が認められた (図6)。湯倉洞窟から西へ約20km、千曲川を臨む標高約350mの地点にある、長野市村東山手遺跡の堀之内2式の住居跡3軒から出土した深鉢形土器の3分の2は、実用本位の無文土器であった。3分の1は磨消縄文で文様を描く深鉢形・鉢形・浅鉢形・注口土器である。湯倉洞窟では約50kg出土した土器の3分の2以上が有文土器であった。深鉢形土器の容量を推定すると、平野部の遺跡では平均約6.7ℓ、湯倉洞窟では3.5ℓ程度と、2倍ほどの開きがあった。この原因には、山道では大形・重量の粗製深鉢を避け、小形・軽量の有文深鉢を選択したこと、堅果類が生育しない亜高山帯では、大形深鉢

は必要なかったためであろう。鉢形・浅鉢形土器はほとんど含まれていない。有文土器の中で注口土器は4分の1超を占め、平野部の遺跡で例をみない比率である。注口土器は液体を注ぎ分ける専用器種であり、火にかけた形跡はないといわれている。狩猟に特化した山岳洞窟では、狩猟にかかわる儀礼の道具であったのだろうか。

標高差約1000mの2遺跡間で、土器組成・法量に大きな差がある事例である。これほどの比高はなくとも山地と海岸部の遺跡間で比較を試みれば、差異が見い出せないであろうか。

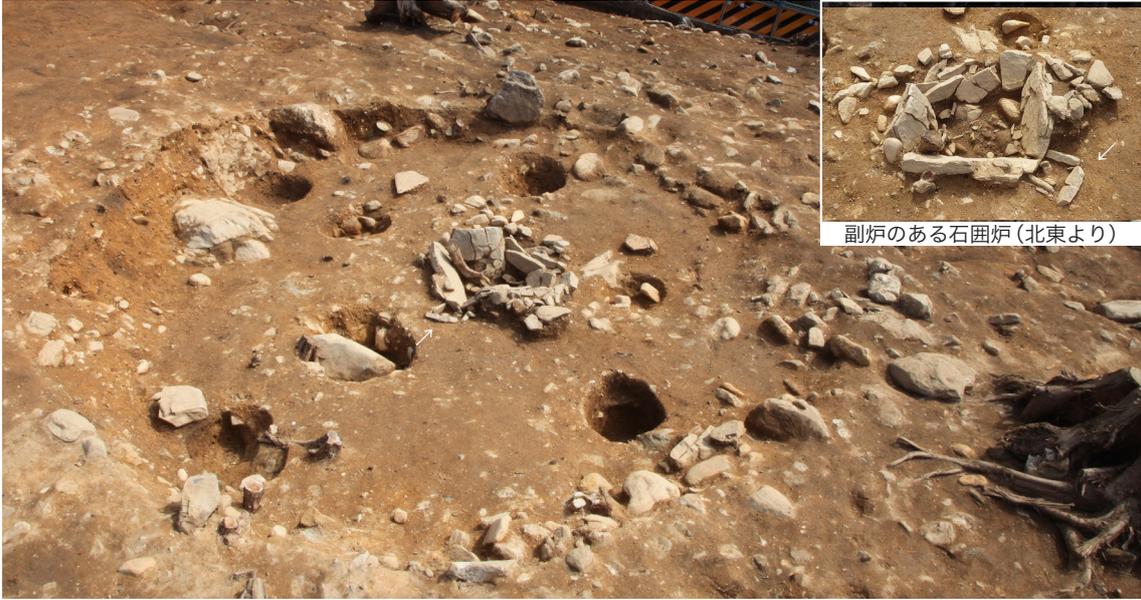
【参考文献】

- 飯田市上郷考古博物館 2005 『平成17年度秋季企画展 下伊那唐草文土器』
神村 透 1978 「結節縄文をつけた一群の土器」『中部高地の考古学』 長野県考古学会
小林達雄編 2008 『総覧縄文土器』 アム・プロモーション
長野県史刊行会 1981 『長野県史 考古資料編』全1巻(1)遺跡地名表 長野県
長野県史刊行会 1982 『長野県史 考古資料編』全1巻(2)主要遺跡(北・東信) 長野県
綿田弘実 2005 「2 縄文時代」『信州高山村誌』第2巻 歴史編 高山村誌刊行会
綿田弘実 2012a 「形と文様は交流を語る—縄文土器」『平出博物館ノート』26
塩尻市立平出博物館
綿田弘実 2012b 「中央高地(長野県・山梨県)」『北陸・中央高地の縄文集落の生活と生業』
『縄文集落の多様性』Ⅲ 107~119頁 雄山閣
綿田弘実 2013 「中部山岳洞窟遺跡の縄文土器」『縄文時代』21 縄文時代文化研究会
綿田弘実 2017 「第1章原始 第2節縄文時代」『須坂市誌』第3巻歴史編Ⅰ(原始~中世) 須坂市



縄文時代早期初頭建物跡内遺物出土状況(南東より)

滝瀬遺跡18B区 縄文時代早期初頭集落跡(南より)
【白矢印が建物跡の位置】

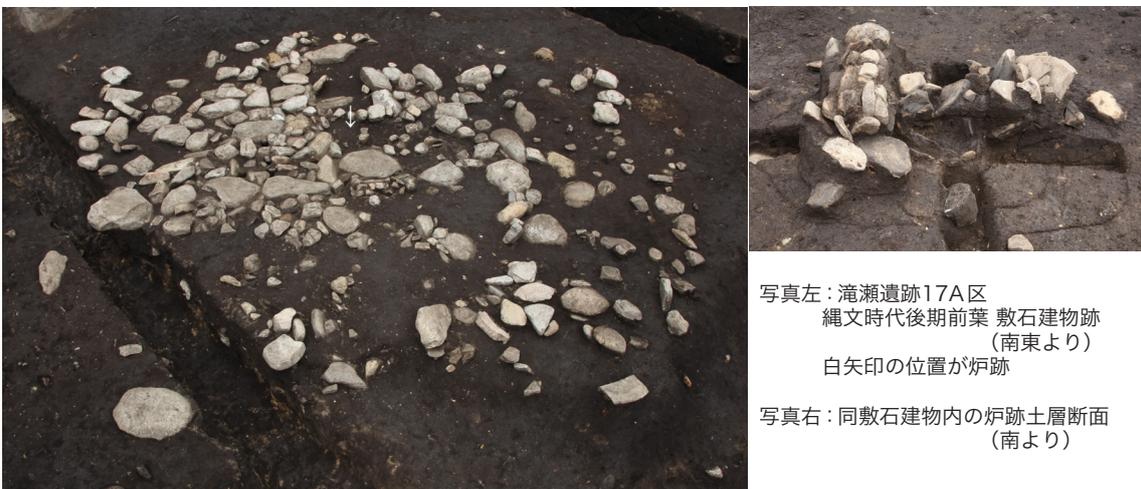


副炉のある石囲炉 (北東より)

大畑遺跡16B区 縄文時代中期後半 副炉を有する石囲炉のある竪穴建物跡 (北西より)



西地・東地遺跡14B区 縄文時代中期末～後期初頭 石囲炉跡内一括出土土器 【右上写真が竪穴建物跡と出土した石囲炉跡】



写真左：滝瀬遺跡17A区
縄文時代後期前葉 敷石建物跡
(南東より)
白矢印の位置が炉跡

写真右：同敷石建物内の炉跡土層断面
(南より)

年代	時代	主なできごと	愛知県の遺跡	トラロウ・器	石原遺跡	万瀬遺跡
2000年	近代・現代	1945年 太平洋戦争終結		★		★
1900年	江戸時代	1867年 大政奉還			★	★
1800年	江戸時代				★	★
1700年	江戸時代				★	★
1600年	江戸時代	1603年 徳川家康 江戸幕府を開く	吉田城跡 (豊橋市)			★
1500年	室町時代	1575年 長篠の戦い				★
1400年	室町時代	1467年 応仁の乱				★
1300年	鎌倉時代	1338年 足利尊氏室町幕府を開く	武節城址 (豊田市) 田峯城址 (設楽町) 津貝城址 (設楽町)			★
1200年	鎌倉時代	1192年 源頼朝鎌倉幕府を開く	普門寺跡 (豊橋市) フヤキ窯跡 (東栄町)			★
1100年	平安時代	元寇 (文永・弘安の役)	大根平遺跡 (設楽町)			★
1000年	平安時代	藤原氏の摂関政治				★
900年	奈良時代					★
800年	奈良時代	743年 東大寺大仏建立の詔・国分寺	三河国分寺跡 (豊川市)			★
700年	飛鳥時代	710年 平城京遷都	白鳥遺跡 (豊川市)			★
600年	飛鳥時代	645年 乙巳の変 (大化の改新)	丸根古墳 (設楽町)			★
300年	弥生時代	女王卑弥呼邪馬台国を統治する 大和政権の出現・各地に古墳の造営 仏教の伝来	馬越長火塚古墳 (豊橋市) 屋木下古墳 (設楽町)			★
A.D. 1年	弥生時代					★
250年前	縄文時代	土器棺葬群が形成される 稲作の開始 環濠集落の出現 金属器の使用・銅鐸の使用	白石遺跡 (豊橋市) 瓜郷遺跡 (豊橋市) 西向遺跡 (東栄町) 欠山遺跡 (豊川市) 馬越長火塚古墳 (豊橋市) 丸根古墳 (設楽町)			★
300年前	縄文時代	抜歯風習の盛行	榎平遺跡 (東栄町)			★
400年前	縄文時代	寒冷化し、海退した低地にも生活を始める	石岸遺跡 (新城市) 笹平遺跡 (設楽町) 大名倉遺跡 (設楽町)			★
500年前	縄文時代		吉胡貝塚 (田原市) 宮崎遺跡 (豊橋市) 麻生田大橋遺跡 (豊川市)			★
600年前	縄文時代	貝塚の形成 気候の温暖化による海進	モリ下遺跡 (新城市)			★
1500年前	縄文時代	土器の発明・弓矢の使用 水河期が終わる	茶臼山遺跡 (豊根村) 駒場遺跡 (豊川市)			★
2500年前	後期旧石器時代	鹿兒島県始良カルテル (A.T.) の降灰	萩平遺跡 (新城市) 川向東貝津遺跡 (設楽町) 滝瀬遺跡 (大豊遺跡) (設楽町) 多り畑遺跡 (豊橋市) 大安寺遺跡 (豊田市) 鞍舟遺跡 (設楽町)			★
3000年前	後期旧石器時代		上品野遺跡 (瀬戸市)			★
3500年前	後期旧石器時代	台形様石器・ナイフ形石器 ・局部磨製石斧の出現				★

縄文時代とは

日本列島において、縄文土器と呼ばれる土器が製作・使用されていた時代です。一般的には、後期旧石器時代にはなかった土器の登場および弓矢の使用開始から、水田稲作農耕が本格的に始まる弥生時代までの間の時代になります。縄文時代は、狩猟・漁撈・採集や管理などの植物利用による生業を営んでいましたが、そのあり方は、地域や時期によりさまざまです。

縄文時代は、一万年以上にもわたる長い時代です。そのため、研究者の間では、

草創期 (15,000年前～11,000年前頃)	早期 (11,000年前～7,000年前頃)
前期 (7,000年前～5,500年前頃)	中期 (5,500年前～4,500年前頃)
後期 (4,500年前～3,200年前頃)	晩期 (3,200年前～2,500年前頃)

の六時期に分けられています。

令和元年度 設楽ダム関連発掘調査成果報告会 **新設楽発見伝6** 配付資料

令和2年3月7日 発行

編集・発行 **愛知県埋蔵文化財センター**

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802 の 24 電話 (0567) 67-4163 【調査課】

HP <http://www.maibun.com> Facebook <https://www.facebook.com/maibunaiichi>
Twitter https://twitter.com/aichi_maibun